

---

# 神封巫女伝

栗田隆喬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神封巫女伝

### 【Nコード】

N5925G

### 【作者名】

栗田隆喬

### 【あらすじ】

アミネは悪意ある森の神々や精霊を封じる役目を負った巫女だった。すでに神々や精霊が封じられたはずの森を旅していたアミネ。そこに封じ損ねられていた神を見だし、神封じを行う。しかし、大巫女への報告で、つい口を滑らせたため、神封じの巫女から位を下げられ、追放同然で辺境の地に赴くこととなった。

## プロローグ（１）

### プロローグ

森の奥に分け入ると、それだけで感覚が鋭敏になってくる。風の音、木の葉の動き。わずかな異変と大きな変化が、混ざりあってアミネを包んだ。

ふと、違和感を覚えた。

この森は、まだ生きている。

聞いた話と実際は違っているようだった。

命ある森の息吹は、風を揺らし、透明な光を放ち、まぶしいまでの洪水になって流れてくる。

ふと気をそらすと、そのまま流れにどこかへつれ去られそうだった。

先には、剣を携え、背に小弓を負った兵が、歩みを進めている。

さらにその先には、鉄の大鉦をふるい、通れるだけの道を作る、兵の姿。

だが、光の洪水に気づいているのは、アミネ一人だった。

ほかの巫女ともであれば、おたがいに注意できたかもしれない。だが、あいにくここに派遣されたのは、自分だけ。

外の世界は、兵が守ってくれる。内側の世界は、自分自身で守らなければ。

アミネは意識が光の洪水に流されないように気を張った。そして、前をいく兵士の背を、かわりにじっと見つめた。甲冑に身をつつんだ遅しい背中。

兵はあたりに気を配るようにして横を向いた。すっと鼻筋の通った精悍な横顔。

ふいに兵士は振り向いて、そのまま、足の運びを落とすとアミネ

に並ぶ。森の気配には気づかなくても、一行を指揮するまだ若いこの兵士は、人の気配には敏感だった。いまも、後ろから見つめただけなのに、アミネの視線に何かを感じ取ったのだろう。

「どうしましたか、アミネ様。ご気分が優れませんか」

「お気遣い、ありがとうございます。そのようなことは、ありませんので」

そういつて、アミネはぎこちなく微笑んだ。兵士もにつきりと微笑みを返す。

「そうですか。……でも、もし何かありましたら、すぐに言ってください。わたしにできることならば、何でもさせて頂きますので」

「あ……、ありがとうございます」

アミネはあわてて目を伏せた。笑顔をまっすぐに見られない。ほとんど顔が火照り、心の臓が早く打ってしまう。

人の機微に聡いこの兵士のことだ。すでに、この気持ちは気づかれてしまっている。それでもなお、ごく自然に接してくれた。

それは、巫女としての立場で話をしている時でさえ、自分が特別な存在であることを忘れさせてくれる。上下のつながりではなく、力あるものと守るものの関係でもない。ただ、ともに旅を続ける仲間。彼に導かれる他の兵も、つられるように少しずつ、心を開いてくれた。

だから、今度の旅は、今までの巫女としての生活では感じたことのない、強いつながりを人との間に持てた。それだけでただ、うれしかった。

「できれば、ずっと輿をお使い頂ければよかったです。ここまで来ましたが、あいにくの悪路で。申し訳ありません。ムラまではあと少しですから、どうぞご辛抱ください」

そうだった。この森を抜ければ、旅も終わる。ふたたび征伐のために森を旅することがあっても、他の兵士たちとは、こんな打ち解けて心安い関係は望めないだろう。

二度と会えなくなる。

そう思うと、ずっとずっと旅が続けばと願わずにはいられない。そして、巫女ではなく、ただの娘であったならば……。はしたない。そう分かっていながらも、思わないではいられなかった。

だが、巫女には巫女の役割がある。とくに選ばれたシルメトの巫女には。

アミネは背筋を伸ばすと、はきはきと答えた。

「われらシルメトの巫女は、森を封じるがその役目です。道なき道を行くのも務め。修練は積んでおります。ご安心ください」

「頼もしいお言葉です。ところで、こちらの方角で間違いないですか」

「はい。でも……。実は……。すこし、川の近くに寄ってもらえますか」

「もちろんです」

兵士は声をひそめた。

「……『連中』がいるのですね」

アミネは無言でうなづく。

「わかりました。ありがとうございます、アミネ様」

兵士は一礼すると列の先へと戻った。部下の兵士に指示を出して、隊列を整える。密集して特にアミネのまわりを重点的にかこむような配置になっていた。

倒木をまたぐ。枝葉が折れる音が、いやに大きく響いた。

## プロローグ(2)

一行は暗い森を進んだ。

森の気配は、兵の武具と大鎧、そしてアミネが身につけた鉄の巫女衣と神具に反応し始めた。大きな流れに、今まで隠れようとしていた森の意志が混ざり始める。

クログネ、キタゾ。

ワザワイ、キタゾ。

アラソイ、キタゾ。

アミネは立ち止まった。兵士たちも盾をかがげ、守りの体制を作る。

「聞け、森の神、精霊、暗きものども。我らはイアの末<sup>すえ</sup>。この地は、イアの大王が統べ、光り満ち満ちるイアの国となった。イアの大王の威光は、高き天の頂きより高く、深き地の国の深きところより深く、あまねく行き渡るものなれば、ありとあらゆる神々と精霊はイアの統べるところにより、この現世<sup>うつしよ</sup>に現るるは、あらゆる人は及ばず神々精霊といえども、いと高き深きイアの末の大王が威光を前に、畏みひれ伏すべし……」

強い風が木々の枝を揺らした。葉が舞い、古い木の実がこぼれた。兵士たちの鉢のような兜や盾に、飛礫のように当たっては鈍い音を鳴らす。その勢いは徐々に増してきた。

ひととき大きなこぶしほどの木の実がアミネに向かってくる。前に控えていた若い兵士が飛び出し、盾を掲げた。だが、あまりに急なことで間に合わず、木の実は守りをすり抜けた。

アミネに当たるかと思えた直前、木の実は粉々に砕け散った。シルメトの巫女衣に織り込まれた鉄が作り上げた、結界が発動したのだった。

森はイアの民を受け入れない。あらゆる災厄が、森に入ったイアの民を襲ってきた。疫病、飢饉、そして精霊と神々の襲撃。

アミネたちは民よりも先に、鉄を纏い、森に分け入る。イアの大  
王の威光に刃向かう、森の息の根を止めるために。イアの民を傷つ  
ける森の精霊と神々を、封じるために。

大王は東の地に馬を駆り、鉄の道具も神聖文字ももたない森の人、  
エナイシケを打ち滅ぼしながら進んでいる。

アミネたちシルメトの巫女は森の神々を封じて、イアの民にとつ  
て安全なところへと変えていくのが役目だった。

大王は、あらゆる森の神々と精霊を封じ従えるまで、アミネのよ  
うなシルメトの巫女を、兵士とともに派遣し続けるだろう。シルメ  
トの巫女一行が作った道に沿って、イアの民が森に分け入り、ムラ  
を作る。

ムラをつなぐ森の道は、人々の往来で広がる。森は田畑と牧場、  
整然と植えられた材木の林に変わり、豊かな恵みをもたらす。イア  
の民は増え、豊かになり、イアの大王の威光がすべての土地をあま  
ねく覆うのだ。

繁栄。そのために、神封じは避けて通れない。

この森は、抵抗を示した。シルメトの習いにより、打ち滅ぼさな  
ければならない。

アミネは意識を集中した。

この近くに、必ず大きな力の源があるはずだった。森を流れる見  
えない光の渦の上流に。

「あちらへ」

先に行く兵士に指示を出す。森の攻撃が手薄になった隙に、アミ  
ネたちの一団は、流れの上流へ向かった。前に進むたび、光の流れ  
の強さが増してきた。さすがに巫女の力をもたない兵士たちにも、  
見えず、聞こえないはずの何かが、感じられるほどの強さになって  
きたのだろう。みな、顔付きが険しくなっている。荷馬も暴れ、隊  
列が乱れた。

神に挑む。これから、人の分際で、神や精霊に挑むのだ。

狂っている。

あまりにも多くの神々を封じ過ぎたのかもしれない。接することが増えれば増えるほど、アミネには神や精霊を封じることが、本能的に危うく感じられてきた。

彼らの持つ、単純で、強い、何かの力。抗えないその力に触れるたび、自らの、人という存在の、弱さとはかなさを感じずにはいられなかった。

森を流れる神々と精霊の息吹は、心地よさとなつかしさを呼び起こす。そんな彼らを滅ぼすたびに、心のどこかに喪失感が、澱のようになたまっていくのが感じられた。

その一方で、この地にイアの民が繁栄するためには、彼らを野放しにはできないことも、嫌というほど分かっていた。混沌に満ち、秩序を破壊し、イアの民に害をなす、危険な存在。憎むべき、滅ぼすべき対象。

それに……わたしは巫女なのだ。選ばれた、シルメトの巫女。神を滅ぼすことこそ、我が使命。

シルメトの教義を繰り返し、無理やりにも信じ込もうとしている自分の姿が、滑稽に感じるほど愚かしくも思えてしまう。

いつから、こんなになつたのだろうか……。

初めて真名を探り出し、森神を封じてからだった。

（イアの娘よ。おまえは本当に、そこまでして、おまえたちが言う繁栄とやらを手に入りたいのか。人の分際で神を殺し、精霊を封じてまで……）

真名を得るための、一瞬だが、あまりにも深い森神とのつながり。それは、封じる間に、森神からの最期の問いかけとなって投げかけられた。

わたしは……。

慌てて頭を振る。

うかつだった。これから戦いが始まるのに、戦意をおとす問いを自らかけるとは。

深く息を整え、すべての考えと感情を押し殺す。



アミネは森の悪意を思い出し、神への怒りを高めた。

### プロローグ(3)

あらされて、収穫をあきらめざるを得なかった、農地。

洪水。

害虫。

そして、森の精霊たちによって殺された兵や民たち。すべて、イアの民を滅ぼそうとする、森の悪意だ。

そうだ。

許せない。……許せない。

許せないっ。

アミネは胸元から鋼の短剣を取り出した。服の袖を引き上げる。

白い腕があらわになった。ももとは滑らかであったらうその肌には、蠱く虫のように盛り上がった、無数の赤い傷跡が刻まれている。そこへさらに、躊躇もせず、横一文字に刃を滑らせた。

切り裂かれた傷口から、血が滴る。

森の精気から、血にまみれた短剣に殺気が注がれてきた。

強風が巻き起こり、木々の枝が折れ、飛んでくる。

「アミネ様を守れっ」

指揮する若い兵士のひとことで、アミネを取り囲むように一斉に盾がかかげられた。

そこへ次々と、まるで矢のように鋭い枝が突き刺さる。

(おまえは本当に、そこまでして、おまえたちが言う繁栄とやらを手に入りたいのか)

普段ならその枝も、シルメトの結界で粉碎されるはずだった。ところが、その結界が弱まっていた。真っ先に効果が切れてくるのは、兵士たちに施された結界だった。

鎧や盾を覆っていた力が消えていく。

(人の分際で神を殺し、精霊を封じてまで……)

頭の中を、あの神の言葉が繰り返し繰り返し、あらわれては消えていった。そのたびに、怒りとともにあった結界が弱まっていく。

だめっ。

槍先のような枝は、結界を突き破り、楯をかかげた兵にそのまま当たってくる。

ひとり、ふたりと傷つき、兵は倒れた。

強風が吹いた。あおられた周囲の木が、アミネたちに向かって傾いでくる。巻き込まれた兵士の一人が、倒れて動かなくなった。

勢いに乗って、いままで姿を見せなかった森の精霊たちも悪鬼の姿をとって次々と現れ、襲いかかってきた。

兵はアミネを守りつつ、剣を、鉞を、懸命に振るう。しかし、シルメトの結界を失ったイアの兵は、どこからともなく次々と飛んでくる枝葉や木の実と、勢いづいた森の悪鬼に押されていた。

戦況はあきらかにアミネたちにとって不利だった。しかも、撤退はできない。血路を開こうにも、ここは森。あたりは全て、敵だった。

根源を封じない限り、残されたのは、死。

アミネはあえて目を閉じた。

薄暗い森の木々は見えなくなったが、代わりに、木々の発する光と、森全体を覆い流れてくる気配の元がより明らかになってくる。

ここからもう少し先に、水の気を感じる。その横から敵意に満ちた気配は流れ出していた。

「もう少し耐えて。この森の主を見いだしたっ」

アミネは背から封神の弓を下ろし、その根源を指差した。血にまみれた腕で鉄の鎗矢をつがえ、気配の元に向け、矢を放つ。

ひょう、と音を響かせて弧を描き、さえぎる木々の枝をすり抜けて、破魔の鎗矢は飛んだ。

手ごたえを感じた。腕の傷口には、森とのあいだに、血と鉄を介して一本の線のような繋がりができた。感覚が、溶け始める。アミ

ネの意識は肉体を離れ、森の意識にさまよいだしていた。  
混ざり合った意識は、薄明かりの中に霧の漂っているような場所に運ばれていた。

森の意識が、一気にアミネの意識に流れ込んできた。

可憐に咲く花々。

若木の芽ばえ。

木々の生長。

豊かな実り。

虫たちのざわめき。

鳥の羽ばたき。

動物たちの、暖かな命。

大きく流れる水。

湧き上がる雲、ふきあれる風。

暖かな、太陽。

すべてを包み込む、光……。

## プロローグ(4)

アミネの意識は再び肉体に戻っていた。

腕からの激痛が、森と溶け合った意識を現実に取り戻した。森の神が見せる美しい幻想に惑わされぬよう、シルメトの巫女は日々修練を行っていた。その一つが、覚醒の術。腕には無意識のうちにも短剣が深く突き刺されていた。刃が肉をえぐり、あたりは鮮血に染まる。

これはすこし、深く刺しすぎだな。

尋常ではないはずの肉体の痛みも、すでに一度、身体を抜け出した意識には、どこか遠く、夢の世界のできごとのように感じられる。自分の傷の様子さえ、他人事のように思われた。

むしろ、ひとたび結ばれた森の神の意識との一体感が、あまりに心地よかった。修練の成果とは言え、突然にそこから引き離されたことのほうが、深い心の痛みとなった。

しかし、木の枝に身を貫かれ、命を失った若い兵士の苦悶の表情が目に見え込んできた瞬間、アミネの意識は、完全に戻ってきた。

あの、指揮官だった。

彼が、死んだ……。

自らの肉体の激痛とともに、抑えられないほどの怒りとなって渦巻き始めた。

許さない。

絶対に、許さない。

力あるものであろうと。

たとえそれが、神であらうと……。

アミネは心のうちに、まだ残る森の神の意識を捕らえた。

その名を明かせ。真の名を、我に明かせ。

アミネは自ら、神の意識を取り込んだ。

神の側から見えたのは、人の姿だった。  
薄汚く醜悪な人の姿。それはイアの民。  
鉄。

切り倒される木々。

飢え、衰えていく動物たち。

汚される水。

命を失う、土。

風は不浄を運び、火が森のすべてを焼き払っていく。

清めの名のもとに……。

そして薄汚く、醜悪な衣をまとった、不浄の人。

アミネ自身だった。

アミネの激しい怒りが、薄明かりの世界を大きくゆがめる。

そして炎の柱がいくつも立ち上がり、森の神を完全に取り囲んだ。  
神は、ただ独りの娘の前に、為すすべもなく、炎で焼かれた。

太古よりこの地を統べてきた、檜木の神だった。

枝葉の焦げる音とともに、神の真名が音の塊となってアミネの元に飛び込んできた。

ふたたびアミネの意識は、現実の森に戻っていた。

無意識に入り込んで真名を明かしつつも、手には修練通り、神封の鏡を握っていた。

いざ、儀式の最後の段に入ろうとすると、木の神の声が、人の言葉、それも、イアの言葉でアミネに語りかけてきた。

（人の身で、神を封じる、そのようなことが、許されると思っているのか）

いつか聞いたのと、同じ問い。

だが、アミネは答えない。

先ほどまで笑顔を見せていた、若い兵士のむくろ。そつと唇を重ねると、アミネは血まみれの鉄鏡をかかげ、神の真名をそこに封じた。

あたりに漂っていた神気は、渦を巻きながら鏡に吸い込まれていく。

（身に宿いし力を用いることのできぬ、愚かな女よ。同じ過ちを繰り返し、おまえの民は、やがて森だけでなく、大地も殺すだろう。愚かなることを、忘れぬよう、身体に刻み付けてやる。苦しめ。苦しんで、わが言霊を思い出せ。思い出せぬ限り、苦しみつづけるがいい）

神の、最後の言葉だった。

忘れるものか。

アミネは泣いていた。

何もかもが、離れていく。

そして、すべては、自ら招いた結果なのだ。

忘れるものか。

アミネは手にした鉄鏡を、空に放つ。

赤い血の滴を散らし、きらめきながら鏡は舞い上がった。

「はっ」

傷つけることさえ難しい神封の鏡が、シルメトの気で粉々に砕け散った。

その瞬間、全身を貫くような激痛が走り、呪いが突き抜けていく。だが、アミネにとっては、神の呪いも身体の痛みも、失ったものにくらべたら、どうでもよかった。

森は静寂につつまれた。

あたりには、折れた木の枝と、兵のむくろが散乱している。

先ほどまでの、森の命を運ぶ輝く光の流れは途絶えた。

風のそよぎさえ感じられない。

遠くから聞こえる水音だけが、変わらず、かすかに響きつづけている。

向こうで檜木の巨木が傾ぎ、地響きを立て、倒れた。

古き森の神が、また一柱、消えた。



## 第一章（1）

### 第一章

『……それでは、まだ彼らが残っていたということか』

「はい。エリキ姫様が征伐をおこなった時には、巧妙にその気配を消し、やり過ごしたものと思われませう。しかし、そのおおもとにあった神……古い檜木の神でしたが、真名を明かして封じましたので、二度と精霊たちも動くことはないでしょう。もうあの一帯は安全かと」

アミネはひれ伏したまま、答えた。

『ほう……。真名を明かして……』

蜜蝋で作られたろうそくがじりつと音を立てて揺れた。薄暗い光があたりを照らしている。

神殿の最深部に設けられた、鏡の間。暗い部屋であるにもかかわらず、御簾の向こうからは、おそろしいまでの光り輝く強い気配が押し寄せてくる。

御神体として祭られた鏡は、大王の妹君である大巫女の大鏡と繋がり、大神殿の神気が、仮の宮であるこの神殿にも流れ込んでいた。すべてをあまねく覆う、貴きイアの威光。大巫女の存在も鏡を通して、御簾を払い手を伸ばせば触れられるほどに、近く感じられた。『代償がその傷か』

アミネの左腕は、さらした布できつく縛られていた。

「それよりも、守りにつけていただいた兵を……」

『お前は役目を果たした。同じように彼らもその役割を果たしたに

過ぎぬ。イアの礎となった英霊は手厚く祀り、家族には十分な金銀を渡すように指示してある。残された者も、ふつうに暮らせば一生困らないだろう。おまえが案ずることはない』

あの若い兵から、旅の途中に何度も話に聞いた、老いた両親と嫁入り前の二人の妹たち。

妹たちとのけんか。いたずらが過ぎて叱られたこと。成人の儀式で力試しで一番になったときの大騒ぎ。昇進してから久しぶりにムラへ戻ったときの喜びよう……。

一度も会ったことは無かったが、もう何年も前から知っているような気がしていた。

ものごころついたときには、すでに巫女寮で暮らしていたアミネは、家族、そして家庭での生活というものを、まったく知らなかった。

そんなアミネにとって、彼の話の聞いていると、自分も家族の一員として、ふつうのムラビトとして、一緒に暮らしているような気がした。

毎日が大変で、でも、暖かさ、強い絆があった。

だから、会いたかった。会って彼の死をつぐなわせてもらいたかった。

わずか数月をともに過ごした自分とは比べものにならない時間の重み。彼を失ったことを自分が悲しむのは、遺された家族への冒瀆だろう。

罵って、痛めつけて、できれば……殺してもらいたかった。

叶わないことは、わかっている。

それだけに、金銀があがなえるはずはないにしても、彼らが単に打ち捨てられたのでは無かったことを、せめての救いだと思いたかった。

## 第一章(2)

『民が森に分け入る前に、神の存在を見いだし難をしりぞけ、さらに真名を明かして完璧に封じたとは。今回の働き、見事であった』

「恐れ入ります」

『褒美を取らせよう。わらわにできることならば、叶えてつかわす。何なりと、遠慮せずに申せ』

イアの威光が覆う地で、大王に次ぐ力を持つ大巫女に、できぬことはない。どんな望みでも叶うだろう。

まさに、突然の幸運。いったい何を求めるべきか、よく考えねばならない。

ところが、アミネ自身、思いもしなかった言葉が突如、口をついて出た。

「人が……神を封じて良いのでしょうか、大巫女様」

神殿の気配が滞った。空恐ろしいまでの寒さが、あたりを支配する。まさに、あらゆる流れが凍り付いていた。

しまった、とアミネが思った時は、既に手遅れだった。

何を口走ったか。

気でも触れたのか。

後悔よりも早く、アミネの意識は神殿を抜け、すべての流れが止まった、銀に染まった薄明かりを彷徨っていた。

アミネにとつて、親しい場所だった。あらゆる苦痛と、悲しみのない、『止まった』世界。神以外立ち入ることのない、アミネ一人だけの場所。

ところが、誰もいないはずの目の前に、何者かの存在を感じた。

大巫女様？

そのはずはない。まばゆいイアの威光とは、全く異なる気配に包まれていたから。

神か？

神々や精霊の持つ、古さや威厳はそこにはなかった。

それは、光ではなく、また、闇でもなかった。

あたりに広がる銀色と混ざり、ほとんど溶け合い、目立たないながらも、気づかないではいられない、不可思議であやしげな気配を発している。

時も、光の流れも、すべてが止まっているはずなのに。誰もいないはずの場所なのに。だれが……。

アミネは突然、先程の言葉を吐かせたのが、この見えない存在であることに気づいた。そのものに近づこうとした時、巨大な竜巻のような音が遠くから響いてきた。

アミネは、再び暗い鏡の間に舞い戻っていた。

大巫女がついた深いため息に、張り詰めていた気配が弛み、再び鏡からは光が流れ始める。

『そちは習いを忘れたか』

「もちろん、シルメトの習いはすべて諳じております」

『ならば、そのようになせ』

「しかし……、彼らを封じるたび、言葉が耳をつくのです。人の身にて神を殺し、精霊を封じることが許されるのか、と」

『わらわがなんと言ったか、そちはもう忘れたのか。それともシルメトごときが、わらわに口答えをするのか』

「いいえ、大巫女様」

アミネは改めて深々と頭を下げた。

「失礼を致しました。ご容赦を……」

『そちは真名を求め、闇と深く繋がり過ぎた。邪神に惑わされている。直ちに袂をなせ。……こうなると、何らかの処罰は必要であろう。やはり、エリキ姫に任せたのが間違いであったか。エリキ姫が邪神を見だし、仮名にて封じておれば、そちに余計な穢れを負わせることもなかったであろうに』

慌ててアミネは言葉を継いだ。

「おそれながら、大巫女様。わたくしめが先鋒として討伐を命じられていたら、やはり巧妙な榊木の神の気配隠しには気づかず、同じ過ちを繰り返していたことでしょう。それに、この身に穢れを受け、兵を死に至らしめたのは、私が十分な守りを講じられなかったため。そして、われを忘れ、仮名でよいところを、真名にて神封じをなしたためです。すべての罪は私一人にあります。なにとぞ、エリキ姫にはご慈悲を……」

ふつと大巫女の笑う気配が感じられた。

「エリキ姫を庇うとは。そちはおもしろいの。わらわが何も知らぬと思うのか。そちにどのような仕打ちをしているか」

「それは……。それでも、ただ本当に彼らの……」

途端に、まばゆい光の洪水が、打ち付けるような激しい気配となつて鏡から流れてきた。嵐の河のような大きなうねりに、心が押し流されそうなる。アミネは伏せ、耐えた。

「ええい、黙つていればよいものを、まだ口答えするか。神封じをなした自らの手柄を手放すような言葉を吐くなど。そのうえ、エリキ姫を蹴落とし、階位をあげる好機でもあつたというのに。……愚かな。そちがそのように望むのなら、わらわも応えよう」

さらに大巫女の気配が一段と濃くなった。

「アミネ。そちは穢れた。もう神封じは無理だ。ゆえに、そちをシルメトの巫女の位からはずす。これからハイエワの巫女として、ムラの祭祀に関われ。クタガのムラでは正しい祭りが行われていない。エアの威光を正しく伝えよ。その穢れた身体に、急ぎ禊ぎを為せ。

明日、日の出とともに向かうのだ。よいな」

「……はい」

アミネが改めて頭を下げると、大巫女の気配は消え去っていた。

## 第一章(3)

\*\*\*

ゆらゆらとおぼつかない足取りでアミネが鏡の間を辞すると、少女が駆け寄ってきた。

「アミネ様、アミネ様っ」

身体に比べて少し大きすぎる巫女衣の裾を引きずりながらも、器用にかけてくる。アミネが腰を落とすと、少女は小さな腕をいっばいに広げて抱きついた。

「おてて、怪我したの大丈夫。痛くないの」

「ありがとうございます、ユニ様。大丈夫ですよ」

少女は不思議そうな顔でアミネを見あげた。

「ねえねえ。どうしてアミネ様はユニのこと、ユニ様なんて言うの」「それはですね。……アミネはもう、シルメトの巫女ではないからですよ。大巫女様の命により、ユニ様よりずっとずっと位の低いハイエワの巫女になってしまいました」

「なんで、なんでっ。アミネ様、なにも悪いことしてないでしょう」

「アミネは穢れ、シルメトの任を解かれましたから……」

「なんで、なんで、なんでえっ……おてて怪我までしたのに、とても痛いのに。アミネ様、なにも悪くないのに、悪くないのに……わあああっ」

ユニはアミネの巫女衣をぎゅっとなつかんで泣き出した。静粛な神殿に泣き声が響く。

すると奥の間から、ふくよかな美しい女性が現れた。美しい眉を寄せ、ユニをそのまま打ち叩きそうな勢いでみやると、細い目を更に細めてアミネを睨んだ。

きつとアミネがいなければ、本当にユニのことを打っていただろ

う。

「早くお出なさい。神殿を穢すのですか」

「申し訳ありません、エリキ姫様」

「アミネ様、悪くないのにいいい、わあああっ」

泣き喚くユニを抱きかかえて、アミネは立ち上がった。足早に辞そうとすると、すれ違いざまにエリキ姫は、その消えそうなほど細い目で再びアミネを一瞥した。唇が動く。聞こえないほどのつぶやき。

「……エナイシケにイアの巫女など勤められると思っっているのかしらね、この醜女は」

アミネの足が、止まった。

醜女。分かっけていても、その言葉には、どうしても引掛かっけてしまう。

エリキ姫は、絶世の美女と評判だった。あごから頬にかけては、柔らかな曲線を描いている。控えめな丸い鼻。熟れた果実のような小さな赤い唇。豊かであっつすぐな黒髪。薄い垂れた眉の下には、ほとんど線のような細いまなざしが輝いていた。

一方のアミネは、大きな二皮眼で、長く濃いまつげがただでさえ大きな目を更に大きく見せていた。そのうえ、瞳は不気味に青みがかっている。鼻は憤まじやかとは縁遠いほど、高くて鋭くとがっている。

痩せ気味で、ふっくらとはしていない頬には、笑うと醜いえくぼが浮かんだ。口は横に大きくて唇は薄く、獣のような白い歯が、はしたなく見えてしまう。

そして、吊り上がり気味の濃い三日月の眉は、垂れた形に整えようとすると、なぜか必ず体調を崩すので、手入れがされていなかった。そのため、いつも怒っているようだとか、手入れをしないムラ娘と変わらない、などと噂されていた。

エナイシケの奴婢には、彫りの深い顔付きが多い。アミネは彼らと同じ、典型的な品のない顔付き、『奴婢顔』だった。

エリキ姫のような、穏やかさ漂う美女とは全く正反対。祭祀の鏡や水面に自分の姿が映る度にも、そのことは痛いほどに思い知らされる。とくにアミネは、醜い笑い顔が大嫌いだった。

それに、顔付きだけではない。腰まである髪はいくら油を塗っても、手入れ不足のようにいつも赤茶けていた。手足もひよろりと長くて、体つきからして不格好だった。

ただ、いくら醜くても自分はエナイシケではない。それだけは自信をもって言い切れた。

出生は不明だが、もし本当にエナイシケならば、イアの巫女の候補に入れるはずがない。もちろんエリキ姫もそれを知りながら、嫌みに言っているだけ。

だから、本当は全然、気にするようなことではない。いくら言われても、平気なこと。これも平常心を確かめるための訓練。気にしない、気にしない、気にしない……。

そうは思っても、扱われたように心が痛んだ。

「大巫女様の前で、わらわを二度と侮辱するな」

「私は何も……」

「もう結構。その小さいのを連れて、さっさとお行き。……もう会うことも無いでしょうがね」

エリキ姫に頭を下げると、アミネは神殿を辞した。



## 第一章(4)

\*\*\*

「ユニ様、何があっても神殿では、泣いてはだめですよ。たとえシルメトの巫女であっても、穢れとされてしまいます」

「うん……。でも……。でも……」

「よしよし……」

ユニはアミネに向けられたエリキ姫の言葉を耳にして、余計に大声を上げて泣いた。しゃっくりがそれから全く止まらないユニを抱いたまま、アミネは夕日に照らされた神殿の長階段を一段一段、ゆっくりと降りる。

もうこの長階段を上ることも、神殿の高みからムラを一望することも、無いだろう。

まぶしい夕日は、まもなく西の山へと沈むところだった。山のふもとには広大な森が広がって、ムラまで続いていた。その恐ろしい森から、柵を張り巡らせた土塁がムラを守っている。

土塁の内側には、小さな田畑に囲まれ、大小の家々が建ち並んでいた。夕餉の支度をするたき火の煙が、幾筋も細くなびいて、夕日に輝いている。

田畑には、新しい苗が規則正しく整然と植えられていた。大巫女様の神託によれば、今年は例年にならないほどの豊作になるとのことだった。まだ小さなムラだが、豊かな実りがもたらされると、噂を聞いてさらに多くのイアの民が移り住んでくることだろう。

アミネは、この地に住まう神々や精霊たちを神封じた頃を思い出していた。まだシルメトの巫女位を授けられたばかりだった。あたる森は、神々や精霊の棲まう危険な場所だった。森を平らげてから、わずかばかりの民と移り住み、たった一つの仮小屋のような神

殿。そんなムラは、わずか三年でここまで大きくなった。

アミネは今そびえ立つ神殿を見上げた。仮の宮とはされているものの、太い柱を束ねた立派なもので、ムラの発展を象徴していた。

クタガのムラは、田畑も神殿も貧相だろう。もしかするとエナイシケや森の精霊や神々、そして獣たちから身を守るための最低限の土塁さえ、十分には整えられていないかもしれない。

心に浮かぶ不安を、アミネは無理やりおし隠し、ユニを抱いたまま巫女の寮となっている小屋に戻った。

干し草の寝床があるだけの、粗末な部屋が許された居場所だった。留守の間に、かまどにはクモの巣がかかっている。このままでは明かりはもちろん、煮炊きにもつかえない。

ベそをかいているユニに、すぐ戻るからと告げ、神妙な顔でうなづくユニを寝床におろすと、アミネは向かいの家を訪ねた。巫女寮を取り仕切る夫婦の家だった。かまどの火を分けてもらい、明日にはクタガのムラへ旅立つこと、今まで色々世話になったことへの感謝を伝える。

夫婦は饞別にと、団子を持ってきてくれた。軽くて日持ちがするし、ほのかな甘みの口当たりはアミネの好物だった。腹持ちもよく旅の口糧にも最適だ。アミネは二人に改めて、心を込めた感謝の祝詞を奉げた。

小屋に戻ってみると、ユニは藁に包まって寝てしまっていた。

かまどの灰に火種を置いて枯れ枝で覆う。煙が上がったところで少し強く吹くと、小さな炎が揺れて現れた。素焼の壺に水を張り火にかけ、わずかに残っていたスアの実を溶いて粥にした。塩と香り草で味付けをする。出来上がった頃にはユニも目を覚ますのでは、と思っていたが、ユニは泣き疲れたのか、こんこんと眠りつづけていた。

「さあ、ユニ様。スアの粥ができあがりましたよ。一緒に食べましょう」

声をかけ、軽く揺すってみても、起きる気配はなかった。

アミネは、きれいに切り揃えられたユニの前髪を撫でた。かまどの火にぼんやりと照らされた寝顔を見ていると、急にやり切れなくなる。

いつも「アミネ様、アミネ様」と、行く先へはどこへでも付いて回ったユニ。アミネがしばらく森に征伐へ向かうとなると、それこそ、今生の別れとばかりに大騒ぎだった。

実際、神や精霊を封じそこねて、帰ってこなかったシルメトの巫女は多い。

そんな現実を幼いころから目の当たりにしてきたから、ユニは別れの気配には敏感だった。もともと、ユニはことのほか、勘が強い子だ。すでに神殿の時点で、なにかに気づいていたのだろう。

目を覚ましてアミネがいなくなったことを知れば、ユニはきっと泣き続ける。

もしかすると、裏切られたと思うかもしれない。

そう思うと、胸が痛んだ。

アミネは、静かに寝息を立てるユニを見つめた。

## 第一章（5）

\*\*\*

日が沈むと、あたりはだいぶ冷え込んできた。

小屋を出て空に輝く星を見あげれば、ユニのようなまだ幼い巫女にはすでに遅い時間となっている。

このムラで修業中の巫女たちは、離れに作られた大部屋で共同生活送っていた。帰りの遅いユニを、寮長の巫女はきつと心配しているだろう。

声を再び声をかけて起こそうとしても、ユニは眠り続けている。

冷えないようと、ユニの肩に干し草をそっとかけ、アミネは寮長の小屋に向かった。扉をそっとたたくと、かっぷくのいい寮長がわざわざ表まで出てきてくれた。二人で星空の下を歩きながら、アミネは、ユニが自分の小屋にいること、そのまま寝ていることを告げた。

「ご心配をおかけしてすみません」

「気にしない、気にしない。神殿に行ったとは聞いていたし、あの子、あなたには懐いていたからね。こっちもそんなところだろうと思っていたさ……。ところで、明日には旅立ちだつて聞いたけど」

「ええ、クタガのムラへ、日の出とともに……。ユニには気づかないように日の出前にはムラを去るつもりです」

「それはまた急だね……。さみしくなるわ」

寮長はアミネを抱きしめると、旅の安全を祈る祝詞をイアに捧げてくれた。アミネは深く頭を下げる。

「ありがとうございます。いろいろとお世話になりました」

「とんでもない。世話になったのは、こっちの方さ。今までは」

いい子にしてないと、アミネ様が帰ってこないよ』って言えば、一発だったからねえ……。あんたがもう帰ってこないとなると、きかんぼうのユニをどうやって修行にだしゃいいのか……。私しゃ頭が痛いよ、本当にね」

深い皺のよった眼尻をぬぐうと、寮長は目をしばたたかせながら、首を振ってわざと苦笑いを浮かべてみせた。

もともと活発なユニだから、すぐにおてんばを始めるに違いない。でも、もしアミネの帰りを信じて、いじらしく『いい子』を続けたとしたら……。それはあまりにもやりきれなかった。

ユニは修行を終えたら、昨日までの自分のように、やがては大王のあとに続いて、各地の森を征伐するシルメトの巫女になる。一方の自分は、明日から辺境のクタガで、一生をムラの祭祀に捧げる身だ。もう会えることはないだろう。

明け方前には迎えの者を送るから、忙しいとは思っけれど、最後の晩ぐらい一緒にいてやってくれ、と寮長は言った。

ユニはそのままアミネの小屋に寝かしておくことになった。

## 第一章（6）

\*\*\*

夜明け前に旅立つには、済ませねばならないことはたくさんある。ユニが寝続けているのは、アミネにとって、ある意味幸運だった。

普通なら、大巫女様からの命が下ると旅に必要な資材の一式が整えられ、それから護衛に付き添われて巫女の移動となる。今回のようなシルメトからハイワエへの降格と、辺境への巫女のみのも単独派遣が行われるのは、前例のないことだった。

そのため、必要なものはすべて自分で手配しなければならぬ。

旅の備品を用意するために神殿裏の倉を訪れると、遅い時間にも関わらず、倉番の老人が入口に火をともして座っていた。

アミネの姿を認めると、曲がった腰を精一杯伸ばして立ち上がる。

「アミネ様、お待ちしておりましたぞ」

「お爺さん、申し訳ありません。大急ぎで済ませますので……」

アミネが倉に飛び込もうとすると、

「いやいや、その必要はありませんぞ」

そう言っただけで倉番は得意気に、齒の欠けた口を大きくあけて、しわだらけの顔に笑みを浮かべる。

「実はですの。話を聞いて、わしの方で揃えておきましたぞ。どうぞご確認ください」

たき火のかたわらには、きれいに中身の整えられた背負子と麻の旅衣が一揃え、並べてあった。長旅に必要なものがすべて収められている。

「口糧には軽いものを、少し多めにしておきましたぞ。かならず道中、しっかりと食べて下され。アミネ様は食が細くて、お身体も痩せておいでだから、わしは心配でなんのですわ」

「ありがとうございます」

「わしにできることなど、この程度ですからな。アミネ様、な、…  
…なごり惜しゅうございます」

小刻みに震える老人の顔には、たき火に照らされた皺が少しずつ濃くなつていく。

「おじいさん……」

慌てたように老人は顔をそむけ、鼻をすすった。

「ははは……ちよつとした、夜の寒さでも、鼻水がとまらんで、このさまですわ。歳はとりたくないもんですのう。……そうそう、忘れるところじゃったわい」

そう言つと老人は、腰に下げた袋をさぐり始めた。

「別れに一つ、年寄りのわがままを聞いてくれんでしょうかの。…

…お、あつたあつた」

皮の厚い節くれた手が、包み込むようにして、アミネに何かを握らせた。

「どうぞ、受け取つてくだされ」

ひんやりと冷たく、なめらかなもの。触れた瞬間に、身体を貫くような衝撃が走る。

「森の石でできた、珠ですわ。わしの娘が遺した、たった一つのものでしてな。わしが死ぬまで秘密にして、そのままあの世まで持つて行くつもりでしたがの。アミネ様がクタガに行つてしまつと聞いて、いてもたつてもいられなくなりましてな。この老いぼれ、あわてて隠し場所から、とり出してきたのですわ」

そつと手を開くと、焚火に照らされたのは、濃い緑をした宝珠だった。なめらかな曲線を描いて落ちこんでいく中心には、飾り穴が開いて、そこに真新しい革の紐が通されている。

「もう、ずつとずつと昔のことですがの。なにがあつたのか、いまだによつ分からののですが……。先代の大王様に従い、森へ討伐に出ているはずの娘が、あるとき、ひよっこりと家に戻ってきたのですわ。巫女が討伐の最中に家へ戻るなど、イアの恩光の前に、許さ

れるはずがありませんから。わしも心を鬼にして、追い返したんじゃが、娘はお願いだからと言って、泣きながらこの石をのこしていきおったのです」

ふれている指先に、森の神とひとつに繋がったときの感覚が、かすかに戻ってきた。

「……もしや、穢らわしいものでは、とも思っていて、本当はこのムラにくる前に、捨ててしまおうかとも思ったんじゃないの。この老いぼれ、イアの恩光には疎いですがのう、娘が大切にしておったようだから、何かあるように思っていて、持ってきたのですわ」

触れている指先から伝わる感覚に、懐かしい切なさ、身を引き裂くようなやりきれない悲しさが、同時にわき起こる。思わずアミネは宝珠をきつく握りしめていた。

「これはきつと、アミネ様を守って下さるに違いない。いつかどこかで、お役に立つに違いない。……そんな気がして、なんなんです。だからどうぞ、捨てずに持って下され。後生ですから」

アミネがうなずくと、老人は革のひもを後ろから結んで、首から宝珠を下げてくれた。娘もこんな格好で持ってきたのですわ、と言いながら。

「さあ、アミネ様。早う行きなされ。ほかの用事も、ござりましよう。それに……、ああ眠い。年寄りには朝が早いで、もう眠くて仕方ないですわ。早う家に帰りたくてたまらんです。もうあくびが止まらんですわ。鼻水もとまらんですし、あくびで目もぐちゃぐちゃでは、みつともないですからのう。早う行ってください」

「おじいさん。……いままで、ありがとう」  
「アミネ様……。もういいから……。もう、行きなされ。……早う行ってください」

アミネは後ろ髪を引かれる思いで、倉をあとにした。



## 第一章（7）

\*\*\*

暗い川が、とうとうと流れている。

アミネは腕を覆っていた布をとった。月明かりに真新しい傷口を見れば、だいぶ塞がっている。楔を終えたら、もう布は巻かないことにした。

川べりに立つ。身を覆うものは、ない。青白い光りに照らされ、アミネの細く、しなやかな裸体が川面に映った。ただ、首には老人がくれた緑の宝珠をかけたままにしていた。なぜか、外してはならない気がしたからだった。

アミネはすこしずつ、水へと入った。切り裂くような冷たい流れに、足の指先がしびれてくる。長い栗色の髪は流れに広がり、漂っていた。

一度、身体の流れに沈めてから、アミネは手にした一枚の布をあらためて流れに浸した。

それはシルメトの巫女衣だった。戦いや旅程で生じた生地 of 傷みはつくり、布地に織り込まれていた鉄もほどいてまとめてある。

これまで神々や精霊との戦いから身を守ってくれた巫女衣。それも今は完全にほどかれて、一枚の布地に戻ってしまった。その加護はもう二度と受けられない。

冷たい流れに清めながら、感謝と守りの祝詞を捧げた。

もう、これを着ることはないんだ。

そう思うと、ムラを去ること以上に心細くなってきた。間もなく辺境のクタガに向けて、森の中に伸びる道を延々と歩き続けることになる。ハイワエの巫女になったアミネは、シルメトの巫女衣を着れるはずもなかったし、もちろん護衛の兵もつかない。クタガへの

道は精霊や神々はみな退けられた、シルメトの巫女の言う『安全な道』だった。だが、旅の安全をおびやかすのは、深き森の神々や精霊だけではない。粗野なエナイシケたちが潜んでいるかもしれない。イアの民でも盗賊や追いはぎになって道行く人々を襲う連中がいる。彼らに襲われない保証もない。

普通の民なら、イアの光を導く巫女に、手出しをするなど、考えもしないだろう。だが、イアの威光を蔑ろにする彼らは、目に見えないものしか興味を示さない。現実世界への影響力のない巫女など、彼らにとっては単なる小娘にしか見えないだろう。あるいは、使い道をもう少し考えれば、歩く身代金か。だが、大王と関わることを避けたいと思えば、単なる厄介者にしかならないだろう。

凍るように冷たい巫女衣の生地に触れていると、無防備な自分がありありと感じられて、どンドン、悪いことばかりを考えてしまう。それでも襖の流れの冷たさは、浮かんできた悪い考えをいずこかへ流し、消し去っていった。

代わりにふと、突拍子のない考えが浮かんできた。

もしかすると、神々や精霊より、人間の方が恐ろしい存在なのかもしれない。人間は、森の神々や精霊を、封じてしまうのだから……。

急に、水の冷たさが感じられなくなった。身体の芯が、首から下げた宝珠と響き合いながら温まり、水に対して反応している。倉番の老人が言っていたように、巫女衣の代わりに首から下げた緑の石が、水の寒さから守ってくれているのかもしれない。でも、そんなことがあるだろうか。

危険だ。

そう思った瞬間、切り裂くような水の冷たさが戻ってきた。

やはり、一時的に感覚を失っていたに違いない。

アミネはあわてて、水からあがる準備を始めた。その所作をするうちにも、怒りの対象であるはずの森の神々や精霊が、川の流れを通して、身近な存在にさえ感じられてきた。あまりに冷え過ぎて、

気までおかしくなってきたのかもしれない。その証拠に、次から次へと、イアの巫女にはふさわしくない考えが浮かんでくる。

もしかすると、鉄さえ身につけなければ、森の神々や精霊は我々イアの民も迎え入れてくれるのではないか。イアの民が森に歓迎されるのは、我々が身にまとう鉄が、すべての元凶ではないだろうか。鉄は森を、斧となり切り開き、鋤となって田畑に変えて行く。原始の森は死に、姿を消す。だから、森の精霊と神々は、鉄を嫌うだけではないのだろうか……。

アミネは頭を振った。唇を震わせながら深いため息をつき、イアの威光をないがしろにする危険な考えを振り払う。

そんなの、どうかしている。鉄を身につけないなど、できるはずがない。エナイシケのような野蛮な連中と同列まで、高きイアの民は、落ちるわけにいかないのだから。それに彼らは、うち滅ぼす相手、憎い敵なのだから……。

本当ニ、本当ニソウナノ。

心の奥に聞こえた、かすかな声。

アミネは気づかなかったかのように、その声に蓋をした。

そう。彼らは憎い敵。地上から消し去らないと。イアの威光を、広めるためにも。

だって私は、巫女なのだから……。

身体は芯まで冷え切っている。震えながら巫女衣の布をまとめると、アミネは水を滴らせながら楔の川を上がった。

## 第一章（8）

\*\*\*

旅衣の乾いた麻布が、冷たい体にはとても暖かに感じられる。栗色の髪はまだ湿って重たかった。

旅立ち前にひと眠りできるかとも思っていたが、星の形を眺めるとその余裕は無かった。東にはすでに明けの星が輝いている。間もなく空も白み始めるだろう。

ユニは干し草の中で、まだぐっすりと眠り込んでいる。アミネはすやすやと寝息をたてるユニの髪を、起こさないようにやさしくなでた。

しばらくユニの寝顔を見つめ続けたアミネは、意を決して立ち上がると、そっと荷物を背負い、音を立てずに外に出た。

小屋をふりかえる。

さよなら、ユニ。

巫女の旅立ちは見送らない習いだった。明けの靄にかすんだムラはひっそりと静まり返っている。

ムラの入口を守る門番でさえ夜半過ぎに扉を開け放つと、見送りに当たらぬように脇の見張り小屋に籠もっていた。いつもなら一晩中消されることのない寝ずの明かりも、薪をくべるものがなく、小さな熾火になって細い煙を上げるばかりだった。

みんな、さようなら。

門をくぐると、一人、アミネは明けの一つ星を目印に暗い森へと続く道を歩き始めた。

日の昇る前の空気は、草木の湿り気を含んで張り付いてくる。

後ろを振り向きたくなるのをこらえ、止まりそつになる足をひたすら前に前にと動かし続けた。止めてしまったら、振り向いてしま

つたら、辛くなるだけだから……。  
そのうち、アミネは駆け出していった。

あたりは少しずつ明るくなってくる。

新しい一日の訪れを告げる鳥の鳴き声。こずえの間からは、輝き始めた青い空が見える。さわやかな風が吹くと、木々は枝を揺らし、露になった朝霧のしずくをこぼした。

神のいなくなったはずの森。だが、木々は光りに輝き、森は穏やかだった。

アミネは泣きながら歩き続けていた。

なんで、なんで、なんで。

邪よこしまな神に立ち向かう、シルメトの巫女だったのに。イアの威光に従う、シルメトの巫女だったのに。

たくさんの辛くて厳しい修行。もう、どんなことにも動じない聡明さと、強い意志を持った巫女に、なっただけだったのに。

数多あまたの神々や精霊を封じ、その働きを認められていたのに……。

それが今は、ハイワエの巫女。

シルメトと違い、仮名や真名を明かし神を従える力や才がなくても、祭祀の手順さえ覚えていればハイワエは務まるものだった。そんな位にまで降格されて、一人で辺境のムラに向かっている。

大巫女様の前でいわなくても良いことを言った結果だった。

神殿の奥、鏡の間。遠く離れたミヤコにいます大巫女との、神鏡を通したやり取りが、一語一句、繰り返し繰り返し思い出されてくる。

どうしてあの時、どうして、どうして……。

沸き起こってきた思いに、再びアミネは走り出した。

全力でかける。

道は上り坂。息が上がってくる。体中が、心の臓が、悲鳴をあげている。

だが、アミネは余計に早く走った。

きつければきついほど、苦しければ苦しいほど。

木々が、木漏れ日が、空気が、周りの景色がだんだん混ざり合ってくる。手足がしびれて、思うように動かなくなってきた。

ムラを出てからもう何度、こんなことを繰り返しているだろう。

動けなくなつて倒れるまで、アミネはそのたびに全力で森を駆けた。頭が真っ白になつて、すべてを忘れるまで。嫌な自分が、どこかに消えてしまうまで。

できればこのまま死ねばいいのにと、心のどこかで願いながら。

駆け続けたアミネは身体の平衡を崩し、道沿いにそびえる檜の木のもとに倒れた。まるで見えないなものかに、足を引っ張られるような感覚だった。

全身を巨木の幹に預け、眼をとじる。荒い息を整えるように深く呼吸を繰り返しても、息苦しさは変わらず、動きのとれない全身は今にも痙攣しそうだった。

こんなに走つても、なにも変わらないのに。なにも、変わらないのに……。

急に、胸のあたりに暖かさを感じる。胸の奥の方が、くうつと小さな手で握られているように、痛みとも、暖かさともつかない感覚が広がって行く。

アミネは、全身の力が抜けていくのを感じた。

木の葉を通して、まぶしい輝きと緑の光が差し込んでくる。それは、閉じた瞼のうらからも、はつきりと感じられた。

感覚を失いつつある身体に、硬くごつごつした木肌の奥深くに潜む、川のような水の流れが不思議と気配で伝わってくる。

穏やかな風が火照った頬を撫でた。額から滴り落ちる汗を冷ましていく。心の臓が少しずつ落ち着いてくるにつれて、こもったように聞こえなくなっていた耳は、奥の方から張り詰めが取れて、遠くに響く、かすかな沢の水音が届きはじめた。

疲れ果てたアミネの意識は、水音に誘われるように、そのまま眠りに落ちていった。

## 第一章（9）

夢を見ていた。

それは、ずっとどこまでも続くもやに包まれた、銀色の世界。

アミネの周囲は、音に満ちあふれていた。

かすかな虫の羽音。小川のせせらぎ。軽やかに森を駆け抜ける、動物たちの足音。そして、大地に根を張る草木の力。天を吹き渡る風。そして大地へとこぼれ落ちる、光のきらめき。

風と、大地の間に繰り返す、生命の織り成す音が、聞こえてきた。力強く、深い、たくさんの音が響きあう壮大な和声。

その中に、まるでおびえるようにか細い、それでいて耳障りな、かすれた音があった。

あたりの音と、一つにとけあいたいと願いながら、全くの異質として浮いてしまった旋律。それは、アミネ自身だった。一体になると、張り上げれば張り上げるほど、聞くに耐えないその音は、美しい響きをだいにしにしていく。

虫たちが消える。川の流れは絶えた。動物は死に絶え、草木は枯れ果てる。風は止まり、世界は闇におおわれていく。

嫌だ……。

こんなの、いやあああつっ。

ふと気付くと、あたりは傾いた陽が木々の間からあたりを黄色く染めていた。やわらかな夕の光。遠くからは、ねぐらに戻る鴉の鳴き声。

全身が硬くこわばっていた。体の向きを少し変えようとしただけで、悲鳴を上げそうな痛みが走り、アミネは顔をしかめた。無理をして走り続けたせいだった。

木の根に引つ掛かり、倒れた時にねじってしまったのだろう。足首が火をもつように熱を持って腫れている。鎚でたたかれているよ  
うな、繰り返す痛みがあった。

こんなだから、変な夢を見たのだろう。目尻には、まだ涙の滴が  
乾かずに残っていた。

なんとか起き上がろうとしていたアミネは、その動きを止めた。  
少し離れたところから、かさこそ、と、かすかな音が聞こえる。

誰かいる。

それは明らかな人の気配だった。

全身に緊張が走る。

護身の武術は一通り修めたから、普段だったら自分の身を守るく  
らいはできるつもりだった。

だが、ほとんど自暴自棄になってここまで駆け続けたせいで、い  
まは身体がいうことをきかない。それに、武人のように、痛みの感  
覚を殺す訓練までは受けていなかった。くじいたで足は思ったとお  
りには動けないだろう。まだ治りかけの腕の傷も気になった。

どうしようもないほどに、愚かだった。おのれが絶対的に無力な  
状態にあるということが、身体を震えさせる。

武器と言えるものは、懐に忍ばせた短刀だけ。それは、身を守る  
というより、いざというときに自らの命を決するためのものだった。  
とにかく落ち着け、と繰り返す自分に言い聞かせる。

「気づいたか」

視線を滑らせると、それは若い男だった。

彫りの深い整った顔つきに笑みを浮かべ、アミネの方に近づいて  
くる。

多少訛りはあるものの、流暢なイアの言葉で話しかけてきた。し  
かし、黒っぽい衣、蔓の巻いた小さな弓に矢筒、そして後ろで一つ  
に縛っただけの長髪に怪しげな紋の入った頭帯といった風貌を見れ  
ば、森の蛮人、エナイシケだとすぐに分かる。

男はまるで小動物を生け捕りにするときのように、身を沈め、両



手が空であることを示しながら、忍び足ですこしずつ、アミネとの距離を狭めてきた。

「安心してくれ。あんたを襲うつもりはない」

エナイシケの言葉を信用するほど、愚かではない。覚悟を決めたアミネの手は、そろそろと胸元へと伸びていく。だが、そこにあるはずの短刀は、なくなっていた。

アミネの顔色が変わった。

その様子に、若者も気づいたのだろう。戸惑うようなそぶりでも口をひらく。

「悪いとは思ったが、あんたの持っている鉄は、あずからせてもらった。鉄は、森の怒りを招く。それに、今のあんたがもっていると、どうにも危険だからな」

その一言には、おや、と一瞬、心に引っ掛かるものがあつたが、短刀を盗まれた怒りの方が強く、それもどこかにいってしまった。

「かつ、返せ」

「いいや」

「ならば、さっさと殺せっ」

若者は、にやりと笑みを浮かべた。

「殺すつもりだったら、もうとっくにやっていたさ」

## 第一章（10）

その一言がなにを意味するのか。

アミネの背筋に寒気が走った。それをこらえて、相手を睨みつける。

「何が望みだ」

「人のことを、追いはぎか物取りのように言うなよ。俺はただ、本意ながらも言われたとおりに、倒れていたあんたの介抱をしてやっただけさ」

「言われたとおりだと」

「ああ、そうさ。あんたがよりかかっているその木。その櫛の木の精霊が、俺をここに連れてきた。おまけに、イアの娘を助けろという。嫌々ながら、俺は精霊の言葉に従っただけさ」

アミネは巨木を見上げた。確かに、精霊が宿ついても不思議ではない風格がある。それでもこの森には、神の気配も流れも感じられなかった。もちろん、櫛の木の精霊の存在も。第一、この道は神々も精霊も退けられた『安全な道』のはずだった。

「ふん。うそをつけ」

若者はさもおかしそうに笑った。

「信じられないのだろう。まあ仕方ない。イアの娘は森の精霊と通じられないものな」

その一言に、ふたたび怒りを感じる。

そんなことはない、私が今まで幾多の精霊をこの身に取り込んで封じてきたのか知らないのか。私はイアの威光を負った、シルメトの巫女……だったのだから。

喉まで出かかった言葉を飲み込んで、アミネはおし黙った。

「でもさ、精霊には、形だけでもちゃんと感謝しろよ。……おい、それより、腹減ってないか。あつちで粥をつくっていたところだ。あんた、ずっとぶっ倒れていたみたいだし、見たところ色々が無茶

してたみたいだし。……食べるだろう」

そういえば、早朝にムラを出てから、飲まず食わず。急に胃の中が空っぽであることに気づいてしまう。

やはりエナイシケは卑怯なことをする連中だ。アミネの様子から察して、わざと言ったのだ。

気を許してはいけない。毒の入ったものでも食わせるに違いないのだから。

アミネは若者を無視することにした。黙ってそっぽを向く。

「いらないうてことか。ま、いいさ。俺一人で食うから」

若者が立ち上がるうとする。その時、たき火の煙りに混ざって、おいしそうな香りが漂ってきた。突然、アミネの腹が、大きく鳴った。

きょとんとした表情をした若者は、音の正体に気づくと大笑いをはじめた。

「ちがう。ちがう、ちがう、ちがうっっ」

否定しても若者は取り合わない。腹を抱えて余計に笑いつづける。ひとしきり笑ってから、やっと息を整えた。

「あんたがそう言っんなら、無理強いはしないよ。どんなことにも慎重なのは、森で生き残るために欠かせないからな。だけど、せつかくめぐって来た他人の厚意や大地の恵みを受け取りそこねると、死に繋がることもある。時には素直にすべてを受け取ることも、生きるための知恵の一つさ」

「そんなこと、わざわざエナイシケに言われなくても知っている」

「だったら強情張らずに、食えよ。もし、一服を盛られることを心配してるんだったら……さすがに俺も腹が減ってきたからな。イアの娘には悪いが、俺も同じものを食わせてもらっつもりだ。それで、どうする」

小さくうなずくと、若者は「よし」とつぶやいて、茂みの向こうに消えた。

## 第一章（11）

アミネは逃げ出せないかと、あたりを見回した。荷物の詰まった背負子は、樫の根元に立て掛けてある。

体を少し動かした。足の痛みは強く、腫れはずっと増している。とうてい立って身体を支えられそうにはなかった。無理をすれば痛みをこらえて、何歩か走ることはできるだろう。だが、それだけだ。きつとすぐに追いつかれてしまうだろう。

アミネは痛みで顔をしかめながら、体を横にした。樫の古木の節くれた幹のくぼみは、ちょうどアミネをすっぽりと包み込むようだった。枝の間から見える赤い空と雲。アミネは目を閉じて、風にさゆれる枝の音に耳を傾けた。

しばらくすると、茂みをかき分ける音が聞こえてきた。ゆつくりと目をあけると、エナシケの若者が湯気のたつ朱塗りの椀と匙を手に戻ってきたところだった。

「あいにく、容れ物が一つしかないんだ。俺が先に食ってもいいし、あんたが先でもいい」

「椀ならある。その背負子の袋から取り出してくれ」

若者は持ってきた椀を木の節が平らになった部分に置いて、言われた通りにアミネの粗末な椀を背負子から取り出すと、再び茂みの向こうに消えた。

アミネは若者の置いていった朱塗りの椀を眺めた。湯気のたつ椀は、使い込まれてなおつややかに輝き、まるで磨き上げた石か鏡のようだった。森の柔らかな夕日の光と木々の陰が朱に映し出され、傷さえも滑らかで暖かみのある雰囲気をたたえている。縁のあたりは、使っているうちに少しずつすり減ってきたのだろう。いくつも重ねられた下塗りの黒や濃い朱が、まるで年輪のように浮き出ている。使い込むうちに生じた変化もそのまま造形となるような、ムラではまず見かけない、細やかな配慮で作られた椀だった。

がさごそと音がする。あわてて目を閉じ寝ていたようなふりをした。ゆっくりと目を開け、戻ってきた若者から湯気の立つ椀を受け取る。鼻を近づけてみた。木の実の粉に、豆、根菜、香り草。変な臭いは無い。

その間、若者は少し離れたところで軽く目を閉じ、アミネには分からない言葉でぶつぶつと何かを唱えていた。きつと、食前の祝詞のようなものだろう。

若者は椀を手にして、食べ始める。

アミネもイアに感謝を捧げると、粥を口に運んだ。

「うまい……」

塩の味に香り草が効いている。いや、普段の感覚だと効き過ぎていた。粗野な、きつすぎる、荒々しい味。だが、そのちょっと強すぎる塩味と、香り草の匂いこそ、むちゃをして駆け回り、疲れ果てたアミネの身体がちょうど求めていたものだった。

ちらりと見やれば、若者は黙って匙を運んでいる。

「……なあ、その……お前、名をなんといい」

アミネの問いかけに、男はちらりと目を向けただけで、一言の返事もしなかった。ただひたすら、匙を動かす手を早めている。

「あの……。いや……。実は……。なんてことは、ないんだけど……さつきは、悪かった」

そう言っても、相変わらず若者は黙ってどんどん粥をかつ込むばかりだ。

「……おい。なんか答えろっ」

それでも黙ったまま。

二度と口などきいてやるものか、と思いながら、アミネも黙って匙を動かし始めた。

横目に様子を探ると、若者の食べっぷりはすごかった。まだ湯気の上がるあつあつの粥を冷ましもせず、どんどん口に放り込んで、最後の一すくいまで大慌てで口にした。それから二回、手を打って頭を下げ、また何やらぶつぶつと唱える。

それからやっと、決まり悪そうに頭をかきながらアミネのほうを向いた。

「すまないな、イアの娘。俺たちはあんたたちと違って、生死にかかわることもない限り、食事の時には一言も発してはいけないんだ。食べ始める前に教えておけばよかったな。まさか、あんたが話しかけてくれるとは思わなかったから。……悪かった」

今度はアミネが、黙々と粥を食べ続ける番だった。

「……俺は、ヤツヒと呼ばれている。あんたにも分かっているだろうが、エナイの末だ。熊と猪と大鹿を屠る戦士で、小鳥の目を射抜く狩人。そして、見えぬものと交わり語らう、まじない師」

男はぼつり、ぼつりと、言葉を選ぶように話し始めた。そのすこし訛りのある言葉に耳を傾けながら、アミネはあいかわらず無関心を装って粥を食べ続ける。

アミネの頭が、少しずつ、ぼんやりとしてきた。

椀が重い。

匙が、持ち上げられない。

男の声が、頭の中で、洞窟に籠もったかのように、妙に響いて聞こえる。

「俺は、この辺りの森の、神々や精霊の守護を担っている」  
はっとして振り向こうとしたときには、手の力が抜けた。それは痺れではなく、神封じの時に意識が身体から出ていく感覚に似ていた。

匙が落ちる。

身体を支えられず、世界が傾いて行く。

エナイシケの若者は、冷たい目でアミネを見下ろしていた。

「神々や精霊の言葉に従い、森を守る。それも俺の役目だ……」  
視界が闇に覆われて行く。

あたかも、森の神々や精霊と結びついたときに見える、幻の世界が押し寄せて、そのなかに取り込まれていくようだった。

眠るようにアミネは意識を失った。

## 第一章（12）

ヤツヒは、足元に横たわるイアの娘を見下ろした。

衣の胸元が、ゆっくり上下している様子から、生きていることはわかる。寝ているのに近いのかもしれない。

「おい、起きろ」

イアの言葉で声がけしても、反応はない。

ヤツヒは目を閉じると、森の気配を受け止めた。隠れている光の流れを追って、櫛の木の精霊に繋がる。

「もう出てきても大丈夫だぞ」

そう呼びかけると、暗闇から少女が現れた。大きな黒い瞳でヤツヒを見あげる。

『御苦労だったな、ヤツヒ』

「おう。……本当にこいつが担い手なのか」

少女は深々とうなづく。

『この娘、『外されっ子』であつたろ』

「ああ。おまえにも、森の息吹にも気づかない」

『おまけに、草の組み合わせが見事に効いた。二つそろつとるのは何よりの証拠じゃて』

「それにしてもさ、なんで俺は平気なのに、この娘だけ眠りに落ちたんだ」

『ありや、毒落とすじゃからな。身体にたまつた毒がでていくと、強い眠気が起こる。いくら楔を繰り返しても、神々の呪いを受けている身ならば、あつと言う間にぐっすり寝入ってしまうわけよ』

「俺も少し眠いや」

『娘に触れたり話したりで、気づかぬうちにおぬしも穢れたんじやろ。あとでしばらく、うたた寝でもしてから、ようく楔しろ』

「ああ」

『それと、楔ぎの前は、わしに触れるなよ。……穢らわしい』

「分かってるって。それにしてもなあ、こんどはさすがに内心ひやひやしてたんだぞ。もし俺の穢れが大きかったら、エアの娘と二人そろって、仲良く気を失ってたかもしれないんだろ」

『まあ、そうなるの』

「下手をすると娘の方が先に目覚めて、俺を絞め殺していたかもしれないわけだ。つくづく危ないことをさせるな、おまえも」

『なあに。そうなら骨ぐらいは拾ってやる。感謝しろ』

ヤツヒは苦笑いを浮かべた。

「ありがたいお言葉、だな……。だが、本当はその娘なんかより、俺の方が穢れていても不思議ではないぞ。さつき、嘘をついてしまった」

『一服盛るつもりはない、などと、下手なことを口走るからよ。それに、ほんとうに毒を盛ったわけではなし。ま、気にするでない。平気で言葉を違えるエアの連中に比べたら、全くかわいいもんじゃ。第一、精霊の言葉に忠実に従ったのじゃから、エナイの末としては、最高の行いぞ。よしよし、わしがほめてつかわそう。……どうじゃ、ほめたついでに、願いをもう一つ、かなえてやってもいいかな。何かないか、何かないか』

「断るっ。願い事などもう二度とするもんか。……特にあんたにはな」

『ふん。どうせそのうち、泣きついてくるに決まっとなるに。楽しみにまっついてやるから、それまで取っつけ』

笑っていた少女は真顔になると、足元に横たわるエアの娘を見下ろした。

『だいたい、一服盛るのどのなど、ささいな事じゃ。こやつはエアの娘、それも神殺しの巫女。ついこの前、檜木の森神様がお隠れになったじゃろ……』

「おい、まさかっ……」

『信じられんかもしれぬがな、その、まさかよ』

ヤツヒも、改めてエアの娘を見下ろした。こんな小娘が、神の代



から続いてきた、古い森神を滅したとは。かたわらの少女も、イアの娘を睨みつけている。その瞳には、冷たい光が宿っていた。

『許されるならば即刻、わしがこの手で息の根を止めてやるんじやが』

「俺がやる」

『待て、このまま運ぶんじや』

「……ここで殺してしまった方が、娘のためにもいいんじゃないか」  
『殺すは一瞬。だが償いは、生きたものにしかできぬ。それも時間をかけての。そんなに易々と償いもせず現世うつしよから逃げ出すのを、わしらが許すと思うか。ウイを甘く見るでない』

少女は大きく背を反り、精一杯に意地が悪そうに笑いを浮かべている。

「だけど連中にはどう言えばいい。イアの娘の面倒を見てくれて言うだけでも気が重いのに、さすがにそいつが森神殺しだなんて…

…」

今度は本当に意地の悪い笑みを少女は浮かべた。

『おぬしはまっこと、プノンよの。何をふざけたことを言うとする。

おぬしが面倒を見るに決まっとするだろうが』

「ええっ」

## 第一章（13）

『こいつは傷つき倒れていた。それに餌を与えたということ……』  
「おい、こいつは森の獣ではないぞ。それに俺は母親がわりだなんて……」

少女はさらに、いやらしい笑い顔でヤツヒを見上げる。

『巣立ちの小鳥も、獣も、木々も、たとえ神殺しのイアの娘であっても、ウイの前には皆同じじゃ。よってこの娘の養い親は、ヤツヒ、おぬしぞ。あらゆる生命に祝福あれっ』

少女は軽やかにクルクルと回りはじめた。

『育め、育て、命の連なり、珠のようなり、祝えや唄え、祝えや唄え』

腕を上げ下ろし、手首をくねらせ、笑い声を上げる。自分の回りを踊り巡る少女を目で追いながら、ヤツヒは苦笑いしていた。

「おまえ、本当にいいかげんだな。さつきは殺してやるぐらいの勢いだったのに」

すると少女は、糸が切れたようにすとん、としゃがみこんだ。

『わしらが、どれだけの痛みを負ったか……、ヤツヒにもわからんか……』

「えっ……」

顔を伏せ、小さな肩を震わせている。

櫓の古神は、精霊たちの盟主、それもこのあたりでは一番の大物だった。

つながりの碎かれた人と異なり、神々や精霊は今でも強く一つになっているという。同胞を失う。そこには人の身では推し量ることのできない深い悲しみがあるに違いなかった。

「リリルル、すまない……」

肩を震わせていた少女の動きが止まった。隠していた顔を上げると、そこには意地の悪い笑み。

『ふつ。……かかったの、ヤツヒ』

「……って、おい、またかよっ」

『ふはははは。おぬしの奇魂は、どんどんたまるのお。まったく、ここまであっけなく引っ掛かるのを見ると、こっちが悪いような気になってしまふ。そのお人よし、もう少しなんとかせい』

少女は裾を払い、立ち上がった。

『もしムラの連中にとがめられたら、ウイ・イ・リルルからの命令だと告げておけ。邪魔をするなら恐ろしい呪いをかけるぞ、と脅してな』

「分かった。……それにしても毎度の文句だな。何の工夫もない」

『これが一番利くからの。必要とあらば、何度でも脅せ。ウイの呪いはこわいぞお、イヒヒヒヒ……。それよりヤツヒ。見る』

足元のイアの娘は、片方の腕でもう片方を打つような不自然な動きを繰り返していた。何度も何度も。ただ、ひたすらに。

『これが神殺しの巫女じゃ……。もしかすると、わしらウイの呪いより恐ろしいかも知れんぞ』

その様子はまるで、刃物を腕に突き刺しているようだった。ヤツヒは腰をかがめ娘の腕を見る。白い肌を縦横に切り裂く無数の傷痕。そのうちの一つはまだ新しく一際大きかった。盛り上がった傷口が生々しい。

『懐刀を取り上げておいてよかつたろう。持たせていたら、眠りから覚めるまでに、身体をずたずたにしていたぞ』

「どうしてこんなことをするんだ。それに、安らぎの地に赴いてもこんなふうになんて……」

『本当にブノンか、おぬしは。だからいうておるだろう。神殺しのためよ。わしらに最も近く、最も遠くへ離れてしまった、哀れなやつ……』

「それじゃ、全然わからない」

『ふん。わからんのなら、わからんで構わんさ。……そうじゃ。おまえ、穢れたついでに、あとでこいつを魂支えしてやれ』

「なんだって神殺しのイアの娘なんか……」

『エナイの末なら、ウイの言葉に文句をつけるな、従え。それにもう時をくいすぎた。ヤツヒ、いいかげん行くぞ』

「ちよつとまで、こつちだつて準備が」

『現世うつしよに、人の姿で出てくるだけで疲れるんじや。ゆつくりしたいなら、おまえからもつと奇魂をもらうことになるぞ。ほれ、急げ』

「はいはい……」

ヤツヒはため息をつくくと、火の神に感謝の言葉を捧げ、慌ただしくたき火の始末をすると、荷物をまとめた。

片方の肩に娘の背負子を引つ掛け、もう片方の肩に寝入ったイアの娘を担ぐ。娘の身体は羽根のように驚くほど軽かった。

近くにで見る寝顔は、本当にどこにでもいる娘とかわらない。こうして見ていると、話に聞いていた恐ろしい魔女、『神殺しの巫女』とは、容易に信じられなかった。

長いまつげには涙が浮かんでいる。はじめて出会った時も、こんな風に泣きながら倒れていた。安らぎの世に旅立ったはずの娘の魂は、今度も涙をよんでいる。何がこの娘に涙を引き寄せているのだろう。娘の魂は、どんな旅をして、なにを見ているのだろうか。

ヤツヒは頭を振った。

榎木の神を殺した憎むべき敵に、多少なりとも哀れみを感じるなんて。

『おい、何をぼんやりしとる。行くぞ、早く来い』

「おつ」

ヤツヒは先に行く榎の木の前を追いかけた。

## 第二章（1）

### 第二章

アミネが気づくと、暗闇に包まれていた。あたりをまさぐると、やわらかい草に触れた。頭上は星が輝き、黒々とした木の枝が夜空に影となっている。

まだぼんやりとして魂の抜けたようなところに、少しずつ記憶が戻ってきた。

だまされた。

渡された粥を食べているうちに、意識を失っていた。

一服盛るなどしないと云っていたのに。

エナイシケを少しでも信じでしまった浅はかさが腹立たしい。

それにしても、どうして意識を失っていたのだろう。粥に、イアの巫女が普通知っている毒や眠り薬になる類いの草は入っていないか。つたのに。

イアの巫女はみな、野や山、森に生える薬草や毒草の一通りの知識を学ぶ。アミネも当然のように学んでいたが、幼い頃より、なぜか草花や木々に心ひかれ、他の巫女よりも熱心に教えを受けた。

草木の知恵を受けもつ巫女は、薬司クスリツカサの位をもつ、萎びたような老婆だった。小さなころのアミネと同じくらいしか背がなくて、今のアミネからすれば、胸のあたりにも届かない。顔は真っ黒で、鼻は不格好にとがり、白く濁って充血した目が、ギョロリと相手をにらみつける。ちりちりに絡まり広がった髪。皺だらけの口。わずかに抜け残った焦げ茶の歯が、赤黒い歯ぐきから顔をのぞかせている。もぞもぞと話す言葉はほとんど聞き取れないのに、怒る時は耳を突き破る大声でがなりたてた。

気が悪いし、おつかない。子供たちは皆、年老いた薬司クスノツカサの巫女が大嫌いだ。だから、正体は毒草の妖怪ジャヤイガだとか、エナイシケのお化けだとか、まことしやかに語られていた。

そのころ、草木の知恵を受け持つ巫女はもう一人いた。そちらは薬司クスノツカサの位を受けてはいなかったが、色白の若い女性で、それも穏やかで優しいと評判の巫女だった。

そんなわけで、草木の知恵を学ぶ年のはじめ、年老いた薬司の巫女、通称ジャヤイガに組分けされた子供たちは、先を思うと、まるで希望でもなくしたかのようにうなだれた。アミネはジャヤイガの組になった時、ひそかによるこんだのだが。

子供にも大人にも好かれないジャヤイガ。しかし、実際はクニで一番の薬草の識者で、知らないことは、まずなかった。見知らぬ草や木、実や花が遠方より献上された時も、ジャヤイガは一目で名前から用い方まで、すらすらと答えた。アミネは草木のことなら何でも知っているジャヤイガを、心から尊敬していた。

草木の知恵を学ぶ時のほかに、アミネは暇があればジャヤイガについてまわり、そばでしっかりと聞き耳を立てて、珍しい草花の知識を心に刻み込んでいった。

ジャヤイガとの別れは、あっさりしたものだった。アミネがシルメトの巫女に選ばれたことを伝えると、ジャヤイガは不機嫌そうにアミネの話を途中で遮り、追い払うようにして退けた。

アミネは改めて、あいさつに行こうと思ったのだが、翌日から激しいシルメトの修行が始まると、もうジャヤイガのもとを訪れる余裕はなかった。

それから一度も会っていない。

ジャヤイガは今でも、ぶつぶつと文句を言いながら、片足を引きずるようにして、薬草の庭を歩きまわっているのだろうか。

アミネの心に、背を丸めた彼女の後ろ姿が思い出された。

もう一度、エナイシケに出された粥の香りを思い出す。だが、ジ

ヤジャイガの元で学んだどんな毒の香りも粥には感じられなかった。きつと、イアの民が知らない毒なのだろう。悔しさと同時に、一体どんな草がこの眠りを引き起こしたのか、どうしても知りたくなくなってきた。

無毒な香り草や効果のある薬草も、分量を誤ると毒になることがある。今度の粥も、その類いだろうか。だが、量を増やしたのだとすれば、味も変わってしまうだろう。すると本当は、何だろうか？  
こんな状況でも薬草の知識を求めている自分に呆れ、アミネは苦笑いを浮かべながらため息をついた。

まさか、あのエナイシケに聞くわけにもいくまい。何が原因だったかが永遠に分からないままかと思うと、たいそう残念だった。ジャジャイガなら知っていただろうか？

分からない。  
アミネは彼女から、すべての草木の知恵を受けてはいないのだから。

でも、もしこれが新しい知恵だったとすれば、ジャジャイガはきつと、齒の抜け落ちた口を大開けにして喜んでくれるだろう。そんな気がした。

## 第二章(2)

アミネは少しずつ身体を起こそうとした。全身の痛みは、不思議と和らいでいる。まるで、何日も伏せていた病の床からある日突然に回復したようで、頭のとっぺんから足の指の先まで、驚くほど軽く感じられた。

それでも新しい怪我には、痛みが残っている。左腕の傷跡には、布が巻かれていた。鼻を近づけると少し刺激のある青臭いにおいがする。痛み止めと化膿止めの草が、すりつぶされて湿布されていた。足は動かそうとすると、髓を割るような痛みがまだ残っていた。ひどく腫れていた足首にも、腕と同じように布が巻かれていた。巻く位置や向きに合わせて痛みが出にくい方向へと布の張り方をかえた丁寧な手当に、アミネは驚いた。ムラの治療師には、ここまでの腕も配慮もなかった。

彼らは荒々しく、愚かしい蛮人のはずなのに、なぜイアの者よりもずっと繊細な所作ができるのか。粥を盛ってきた朱塗りの椀にしても、イアの職人には作れないものだった。今までに聞いた話と全然違う。あの男が特別なだけなのか、それともシルメトの習いが、間違っていたのか……。

「あつ。アミネ様が、お目々覚ましたよっ」

鈴のような少女の声が、向こうのたき火から聞こえた。

「アミネ様っ」

この声は……。

「ユニ……様」

「アミネ様っ」

小さな人影が、たき火の影から駆けてきた。アミネがびっくりしている、ムラに残っていたはずのユニが胸に飛び込んでくる。

「アミネ様、アミネ様、アミネ様あぁっ」

アミネは泣きじゃくるユニを抱き締めた。



「よかったあ、お目々覚ましてよかったあ」

「どうしてここに……」

「あのね、ユ二ね、アミネ様がいなくなつて、お馬さんに、お願いにいったの。アミネ様に会わせてくれる、お馬さんは、いませんかつて。そうしたら、シシカゲさんが、乗せてくれたの。それで、ムラの裏の門から、ユ二、だれにも知らずに、こっそり出てきたの」

シシカゲは、エリキ姫の馬だ。大巫女様から賜つたと、いつも自慢にして溺愛していた。とはいっても、自分で手入れをするでもなく、馬房で声がけをするわけでもなかったのだが。

執着の激しいエリキ姫のこと、愛馬が消えたとなれば気を失つて倒れ、病に伏したとしても不思議ではない。

それも馬と共にユ二が消えたとなると、だれの仕業かは明らか。幼い巫女の面倒は、寮長の巫女が負うところになっている。当然その責を問うだろう。エリキ姫からどんな仕打ちを受けることになるのか。アミネはかっぷくのいい寮長に、イアのご加護をそつと祈つた。

「それで、ずっとアミネ様を探してきたら、おじさんとリルルちゃん、アミネ様に会わせてくれたの」

「……おじさん、とはな」

苦笑いを浮かべながら、エナイシケの若者が影から姿をあらわした。アミネは、若者の元に駆け出そうとするユ二を引き止めた。少しでも緊張をゆるめたら途端に気を失いそうだった。何とか意識を集中し、森の蛮人をにらみつける。

「この子に近づくな、エナイシケ」

怒鳴つたつもりが、声がかすれ、まるでつぶやくようになってしまった。

「ずいぶんなご挨拶だな」

「どうしたの、アミネ様」

後ろで、ユ二が不思議そうにのぞきこもつとしている。

「ユ二様、危ないから隠れてください」

「おいおい。別に危害を加えるつもりはないって、何度も言っているだろう」

「そうだよ、アミネ様。あのおじさん、いい人だよ」

「騙されちゃだめっ」

アミネは再びエナイシケをにらみつける。

「心配無用と言っておきながら、私の粥に混ぜものをしたか、まじないでもかけろっ」

「別に何も……」

そうだ。何かを企んでいるぐらいなら、あんなに丁寧な手当をするはずはないだろう。

だが、アミネは精一杯の声を張り上げた。

「うそをつけっ。ならば、粥を口にしたあとの、強い眠りは何だ。

眠り薬かまじないの他に、敵を目の前にしたイアの末を眠らせるものはない」

## 第二章（3）

『敵』と口にした瞬間、アミネの胸の奥に何か割れた。無理に力を加えた枝が、ささくれながら破れる感触。

目の前に立つエナイシケの青年は、もう笑っていないかった。たき火に照らされた陰。表情の消えた鋭い眼差しには、まだ少しはあった親しげな気配が一切消えている。

もしや、取り返しのつかないことをしてしまったのか。本当は使っていけない言霊を、使ってしまったのか。

今なら謝れる。

一言伝えればこれ以上の断絶は防げるだろう。今、謝らねば……。しかし、アミネの言葉は出なかった。

言霊が、青年とアミネの間にあつた溝を明らかにして広げていく。後悔。胸の奥で、何か割れる感触の正体は、後悔だった。

だが、そのことに気づいた瞬間、アミネは反射的に、エナイシケを睨みつけた。

エナイシケは、敵だ。敵を『敵』と呼んで何の不都合がある。イアの祝詞にも、敵を討ち滅ぼすための祈りがあるではないか。

それにどうして私がわざわざ敵に頭を下げ、許しを請う必要がある。悪いのはすべて敵なのに。

そのとき、胸のあたりにふっと暖かい物を感じた。首から下げた緑の珠のあたりが熱い。

いままで聞いたことのない不思議な声が響いた。

「ええい、ひかえっ」

再び珠が熱くなった。いつの間にか若者のとなりにエナイシケの少女が立っている。黒い目をつり上げ、不機嫌そうに頬を膨らませていた。その輪郭は、闇の中にぼんやりと光を発しているように見える。

「あ、リリルルちゃん」

ユニが少女に向かって手を振った。

「これ。リリルルちゃん、ではない。リリルル様、と呼べ」

ユニにそう言つと、ゆっくりとアミネの方に近づいてくる。

「さつきから黙って聞いとりゃ、ゴチャゴチャうるさいのう……」

背の高さはユニより少し高く、年の頃は十ほどであるうか。腰近くまである長い髪を、二つに分けて高く結んでいて、左右に広がる髪は、まるで鳥が羽根を広げているように見えた。

リリルルは、後ろ手に組んで胸を張り、あごをちよつと突き出して、まるで見下ろすようにアミネを眺めやった。その様子はおよそ、小さな背格好に似合わない。だが、たき火の揺らめく揺らめく炎を映した瞳は、他人を見下すかのように輝いている。もったいぶった傲岸不遜な身のこなしは、エリキ姫にも負けないほどだった。

「おい、小娘。おぬしがどう思ってるかはしらんが、粥に毒草の類いは、何も入れんかったぞ。体によい薬草と、害のない香り草ばかりじゃ」

「たとえ薬でも、それが多すぎれば毒となる。私の粥にだけ、増やしたりでもしたのだらう」

「薬も毒もさじ加減ひとつ。間違いない。だが、我らはそこまで暇ではない。おぬしが勝手に寝入っただけであるうが。そのせいでヤツヒはここまでおぬしを担いで運ぶ羽目になったのだぞ。わしらに余計な手間をとらせた分、謝ってもらいたいところだ。のう、ヤツヒ」

エナイシケの青年は、どこか遠くの方をみながら、小さくうなずいた。

「これからやることはごまんとあるぞ。こつるさいイアの娘よ、もう少しゆっくり休んでおけ。日が昇ったら出発ぞ」

アミネが口を開こうとすると、少女はその言葉を遮った。また怪しげな笑みを浮かべている。

「今はまだ、何も知らずともよい。必要があれば、自ずからすべてが明らかになる。それまでさっさと寝ておれ」

その一言で胸の宝珠が再び熱をもち、アミネは再び意識を失った。

## 第二章（４）

アミネはこんこんと眠り続けていた。

夢うつつに意識が戻ってきたとき、身体全体が大きく揺れているのを感じる。獣の臭い。道を踏みしめて進む感覚は、馬に乗っているようだった。ユニが乗ってきたというシシカゲだろうか。

背後からは、誰かがアミネの身体を支えている。頭のどこかで、他人に身体を預けるなど巫女にあってはならないこと、と声が聞こえる。だが、森の木々に身を委ねたときのような不思議な安心感にその声も消えて行く。時々身体がずり落ちるように傾くと、包みこむようにしてそっと引き上げてくれる。そのときふわりと草の香りがした。

アミネの耳元に、低い声がささやかれた。異郷の言葉だった。まったくわからないはずのその言葉の響きが、なぜか懐かしく、心地よかった。

それが、「敵」だと気づいた時、再びアミネは夢の世界へと漂い出していた。

巨木が覆う緑の大地をアミネは歩いていた。

道はない。それでも脚は、自然と木の根や石を避けて歩きやすい足場をたどっている。

どこからともなく霧が流れてきた。日の光が遮られる。あたりは輝く白色に包まれた。かすかな風に、ゆっくりと霧は流れていく。冷たい湿り気が肌に纏わり付いてきた。どんどん視界は悪くなっていく。それでも森の木々の緑だけは、白のなかに埋もれることなく、ますます濃くなってきた。

足もとに、ひんやりとした水の流れを感じた。小川だろうか。深さは足首ほどしかない。川底は丸い石が並んでいるようで、足裏に

あたる滑らかな感触が気持ちよかった。

清涼を感じる冷たい流れには、足の底や指先に滞ったものを運び去るような力が感じられる。

アミネは流れのかみてに向け、歩き続けた。ただ、歩き続けた。

水は冷たく、指先が少しずつ痺れるような感覚に襲われてくる。

だが、その痺れさえ心地よく感じられてきた。

足の指の先端に起こった小さな振動が、少しずつ、膨らみながら体中を駆け巡る。そのまま頭と手の指の先を突き抜けていくような感覚が、一步、一步と歩くたびに強くなってきた。

ふと気づくと、辺りの霧が少しずつ晴れている。

霧がほとんどなくなったところ、アミネは小川づたいに池のようなところにたどり着いていた。

池を囲む木々は、ムラの神殿よりも数倍もの高さで、見上げてもつぺんは雲の中にあるかのようにだった。葉の緑は今まで見たことがないほどに濃い。その丸い葉の表面からは、金色に輝く光の粒が空へと立ちのぼり始めた。

無数の木々から次々に立ちのぼる光の粒で、霧に白みがかつていたはずの空気は、次第に金色に包まれていた。

その光景に圧倒されアミネが立ち尽くしていると、滑らかな鏡のようだった池の中心に突然、泡が沸き起こった。水底には大きな暗い影が潜んでいる。赤い二つの光がぼんやりと浮かんだ。途端に、先程まで輝き光を放っていた漂う金の粒が、一斉に光を吸い取り始め、一気にあたりは暗闇に転じた。唯一の光は、泡立つ水底に輝く、二つの暗赤だけ。

## 第二章（5）

やがて水の泡立ちは、沸騰した湯のように強烈な熱を伴ってきた。大気は熱くなり、吹きかかる蒸気から逃げるようにしてアミネは、背を向け駆け出した。

水しぶきを上げ走る。

丸かったはずの川底の石は尖り、まるで幾千もの刃を突き立てたようになつていた。

水底に潜む影の気配が熱気とともに迫った。足の切れる痛みに歯を食いしばり、漆黒をアミネは走り続けた。流れ出る血が水の流れに黒赤い帯となつて、光を発していく。その色はまるで、背後に迫りつつある水底の二つの赤と同じだった。

アミネは走った。

吸い込む熱が、喉と胸を焼く。

足元の水はどんどん熱くなっていく。

身体中が汗を吹いた。だが、迫りくる存在の放つ恐怖に、芯の方は氷のように冷たく固まっている。

息が切れる。

心の臓も切れかかっていた。

まるで払われたように足が重なり、アミネは熱湯へ伏せ倒れた。

全身を川底の石刃が貫く。あまりの痛み悲鳴を上げ、アミネは宙を仰いだ。

涙がこぼれる。視界に広がる暗闇に、小さな点のような輝きがあった。はじめは涙の滴が、たまたま光を映しただけかと思つたが、それは少しずつ大きくなり、立ち込める暗黒の霧を引き裂く青白い光となる。

強く細い光。

それはまるで風に揺れる布のように闇を照らしていた。まゆい光の中には、黒い影があつた。一瞬、すつと熱を払う心地よい微風。



それまで近づいてきた熱気が弱まる。背後から迫っていた存在は、突然現れた光に戸惑い、ためらっているようだった。しかし、しばらくすると再び熱気が強まりはじめた。

迫りくる気配。血にまみれ、傷尽き果てたアミネは、もう逃げ出す気力もなかった。

降り注ぐ光を仰ぐ。

光の中にあつた影が、ゆっくりと降りてくる。大きく羽を広げた鳥の姿だった。驚だろうか。鋭い瞳がアミネを見つめていた。

舞い降りた鳥は、アミネを翼でそつと覆った。柔らかな羽毛の感触がアミネの傷ついた身体を包んでいる。先程までの強烈な熱気とは全く違う、羽根で覆われた暖かな暗闇。

アミネの夢の記憶にあるのは、それが最後だった。

## 第二章（6）

熱い。

アミネの心に浮かんだ一番初めの言葉はそれだった。

全身を滝のように流れる汗。麻の衣がべつとりと身体に張り付いている。

空気は焼けるような熱い湿気を含んで、いぶくさい。すぐ傍らでは、ぱちぱちと小枝のはぜる音が聞こえる。

遠くには川の流れる音が聞こえた。

アミネはゆつくりと目を開く。

形よく組まれたたき火が、すぐ近くで炎を上げていた。その中には大きな石塊が焼かれ、赤黒く輝いている。

頭の上には、木の柱に支えられた骨組みに、草の茎葉を葺いた天幕のようなものが見えた。ススで黒ずんだ内側に、影が揺れる。

「気づいたか」

エナイシケの若者、ヤツヒだった。

その姿に、アミネは一瞬身を固めた。

ヤツヒは腰から上には何もまもっていない。引き締まった身体。

つややかな肌には、ところどころ渦のような文様が描きこまれている。汗の滴る胸板は、まるで油を塗ったように赤い炎を映していた。少しやつれたように見える顔には、不精髭がうっすらと浮かび、窪んだ目が暗闇からアミネを見つめていた。まるで獣のような、鋭い眼差し。

アミネは目をそらせ、頷いた。

「運よく、戻ってこれたな」

ヤツヒがじつとこちらを見つめ続けているのを感じる。居心地の悪さに比べ、身体の様子は思った以上に心地よかった。少し痛みが残っていたが、脚もほぼ問題ない。

立ち上がるうとすると、ヤツヒが手を差し伸べた。

思わず出しかけた手を、アミネはあわてて引っ込めた。

「……ばかにするな。一人で立てる」

「まだ、無理だと思いがな」

腹に気合をいれ、脚に力を込める。少しずつ腰が上がった。

「ほらみる。立つことなど造作ないでは……」

ところが急に身体が傾き始めた。平衡を崩したアミネは、そのままたき火の方に倒れていく。

このままでは完全に火の中に身を投じるような格好だ。炎の舌と焼けた石が、少しずつ近づいてくる。

炎の揺らぎと、舞い上がる火の粉の動きが、あまりにも間延びして見えた。だが、身体のほうはまるで自由がきかない。悲鳴を上げる間もなく、炎に巻き込まれ、灼熱の石に焼かれるしかなかった。

倒れる一瞬、アミネはふと風を感じた。

気づくと、ヤツヒの腕に抱きかかえれ、炎から遠ざけられていた。

間近に迫ったその瞳に、心の奥底まで覗き込まれるような格好だった

「な、何をするっ!」

「俺も困るんだ。あんたが身体を大事にしてくれないと」

「エナイシケに情けをかけられるほどイアの巫女は落ちぶれてはいない! ええいつ、放せっ!」

アミネが暴れようとすると、ヤツヒは背を軽く、ほとんど触れるようにはたいた。

身体の髄に鈍い衝撃が走る。目の前のすべてが赤く光り、とたんに視界が暗くなった。腕や脚の力が完全に抜け、身体がまったく動かない。

「神殺しに情けなぞかけるものかっ」

手足に力の入らないアミネは、無造作に砂の上にほうり出された。「誰が、おまえなんか……。俺達が必要なのはその身体だけだ。

魂支えも、精霊の言葉に従って身体の傷みを防ぐために仕方なく行っただけだ。自惚れるのもいいかげんにしろ。本当なら、この場でおまえなぞっ……」

衝撃を受ける。仰向けとなったアミネにヤツヒが覆いかぶさるよう  
うにして乗りかかっていた。

## 第二章（7）

目を血走らせたエナイシケの青年。

首もとにその手が伸びた。

巫女の護衛についていた兵士たちに比べるとまるで女のように細く柔らかな手。だが、内側から息の根を止められる強い気配が指先から迸っている。

恐ろしかった。

それは森の神々や精霊のもつ敵意と全く異なる、人の持つ憎しみの感情。それが、何かによって強められ、アミネに向けられていた。指先にわずかながら、力が込められる。

首の奥が握りつぶされるような感触。

アミネの心の臓が激しく打つと、それから急に頭の奥から身体の内芯まで、冷たい静けさが広がった。

これまでのすべてが、つまらない舞踊の出し物のように感じられた。

それも、品がなく、くだらなく、みつともないばかりの舞。

やっと恥さらしを終え、幕の後ろに引っ込むのだ。……いや。引きずり下ろされるといふ方が正しいかもしれない。

そう思うと突然、笑いが込み上げてきた。どうにも滑稽で仕方がない。

息苦しくなってくるはずが、全く痛みも苦しみも感じなかった。

首が絞められ、笑い声も漏れなかったが、アミネは薄れゆく意識の中で、壊れたように笑っていた。

目尻からは涙がこぼれた。悲しくはない。だが、止まらない笑いと 同じように、なぜか涙が止まらなかった。

滲む視界に、森の神との戦いで死んだ若い兵士の面影が浮かんだ。目の前のエナイシケの男と重なってくる。

なぜだか、この期に及んで自分を殺そうとする若者にアミネは同

情を寄せていた。

その理由も分からない。だが、心の奥に、自分と同じような何か  
があつて、それにこの青年も突き動かされているのを感じた。

血走らせたヤツヒの目を見るたび、今度は無性に悲しくなつてく  
る。

首元を絞める手が食い込んできた。それは細く鋭い刃物のようだ  
つた。肉を切り裂く猛禽の爪。

かろうじてそれを防いでいるのは、アミネの首を覆う無数のしな  
やかで硬い鱗だった。

気づくと、アミネは白い蛇と化していた。目の前のヤツヒは夢に  
出てきたのと同じような赤茶の羽根を持った鷲となつている。だが、  
夢とは違い、黒々とした瘴気のようなものが全身から立ちのぼつて  
いた。

赤い目。開かれた鋭い嘴。そこからは赤黒い舌がのぞいている。

蛇を襲う鷲。それはどこでも見られる光景だったが、突然、幼い  
ころに遊んだ三竦みの遊戯がよみがえつた。

鷲、蛇、そして、人。

『鷲八、蛇ヲ屠ルモノナリ』

ヤツヒの内に秘めた鷲が、地を這う蛇である己の最期を握ってい  
た。

張るような耳なりが、どんどん大きくなってくる。目の前がかす  
む。

鷲が口を大きく開き、白蛇を飲み込もうと迫ってきた。

## 第二章（8）

罪深い存在が、消える。世界に、神々に、不調和な調べを奏で続けていた害を為す存在が消える。

ずっとそうなることを願っていたのかもしれない。

悲しみを通り越して、アミネの心には安らぎと喜びが浮かんできた。

目を閉じる。胸元の石からは暖かな感触が広がってきた。

最期の衝撃は、こなかった。

恐る恐る目をひらくと、鷲が触れそうなほど間近に迫った嘴を引き戻し、じつとアミネを見つめていた。

血走り燃えるように輝いた瞳は冷え切って暗い陰が宿っている。威嚇するように広げていた羽根を徐々におろしてたたむと、アミネの身体を押さえ付けていた爪をゆっくりと外した。

鷲は少し距離をとって、アミネを見下ろした。その姿がゆっくりと消え、やつれた姿のヤツヒに変わった。霞に包まれていたような周囲も、小さな草葺きの天幕に戻っていた。

首元を押さえていた力がゆるめられる。

たき火で暖められた熱い空気が急に胸へ流れ込んできた。今まで気づかなかった息苦しさのアミネは激しく咳き込んだ。

喉が張り付いている。胸が、芯から焼けるようだった。

涙目には、すべてが紫色に染まって見える。その色合いと痛みが、心の臓が打つ響きに合わせて強まった。

しばらく咳きは続いた。

気づくと、エナイシケの青年の姿は天幕になかった。

嗚咽の混ざった咳きと、押し殺したようなアミネのすすり泣きだけが、天幕から漏れた。

暗い川のほとりにヤツヒは腰掛けていた。

水に写った月の光を眺めていると、両手に人を殺めかけた感覚がよみがえってくる。それも腕の力でなく身体の芯を流れる力を使っただけに、染みのように拭えない。

ヤツヒは頭をふると立ち上がり襦のため流れに入った。

夜空を仰ぐように身を沈めれば川面には月の形がゆらりと揺らいでいる。そのまま川底へと潜れば、ほてった身を流れが冷やした。水の冷たさは頭の芯まで染みるようだった。

まだ若く、知恵も経験も十分でないことは分かっている。それでも、目に見えぬ世界と通じ、少しのことでは動じない心構えができていると思っていた。

娘の魂支えをしてやれ、とリリルルに言われ、それがたった一人での魂支えだと分かった瞬間に面倒という思いが突然、誇らしげな気分変わった。

その時、気づくべきだった。

言葉ひとつで心持ちが変わるほど、未熟だったことに。

浮ついた心で魂支えに挑んだところで、ヤツヒの思った通りにことは進まなかった。

イアの娘の魂は暴れ、それを無理やりに抑え込もうとするヤツヒの心も乱れた。心の乱れに魂もつられた。自らを御することさえ危うく、己を失うところだった。

娘の魂が蛇の相だったからに違いない。

ヤツヒの奥にある鷲の相からすれば、蛇は格好の餌食。落ち着きを失った魂が自ずから動き出せば、蛇に襲いかかるのは当たり前のこと。

そのうえ相手は、イアの民。



多くのエナイの末を、勇敢な戦士を、罪なき女子供を殺し、森の神々を封じ、木々を焼き払い、水を汚し、大地を殺してきた連中。

再びヤツヒに怒りが沸き上がってきた。憎しみが水で冷えたはずの全身を熱くする。

怒りを腹の底で押さえ、暴れだした魂の勢いを殺そうとする。冷たい流れで身を清めていたはずが暴れる心は収まるどころではなかった。

水中の景色が消え去り、薄暗いもやの中に、魂が凶悪な気配を伴った驚の姿を形作り始める。

血走った瞳がヤツヒを見据えた。

## 第二章（9）

傾いた魂が己を支配すれば、もう、正気に戻れる自信はなかった。イアの娘を殺そうとするぐらいでは済まないだろう。だが、今のヤツヒは怒りが生み出す破壊に強く惹かれていた。

あらゆるものを破壊し尽くす衝動。

壊し、屠り、無に帰す快感。

大切に、心寄せ、愛しいものが砕け散る瞬間。魂と命が損なわれ、引き裂かれる悲み。

その頭上から背を突き抜ける衝撃が、ヤツヒにとって痛みよりも甘美な快楽となっていた。貪るように求め、鷲の血走った瞳の奥に広がる無限の闇に引き寄せられていく。

ふと気配を感じると、目の前に少女が映った。触れそうなくらい近くに檜の木の精霊の哀しそうな瞳がある。暗い水底に、瞳に宿る光が揺れる。

考えに深く沈んでいたヤツヒは、突然のことに驚いた。もやに包まれた世界も暗黒の鷲も消える。代わりに冷たい流れへ沈みかけた自分と、かたわらに泳ぐリリルルの姿があった。

精霊リリルルは何も身につけていない。長い髪が川の流れに衣のように広がり、しなやかな身体をわずかに隠しているだけだった。

目が合うとリリルルは白い歯を見せて、ニヤリと笑った。笑みを浮かべた口からは、小さな泡が糸を引くように連なって流されて行く。

途端に息をすることを忘れていた苦しさに気づいて、ヤツヒは慌て、胸に残った息を吐き出してしまった。水を飲み、むせて溺れそうになりながら、川底の石を蹴って上へ泳ぐ。

水面から夜の冷えた夜闇へ顔を出し、一気に胸へと息を吸うと、ヤツヒはむせてふらふらになりながら河原に上がり、倒れた。

背後には水から上がってきた足音が聞こえた。

『みつともないのお、エナイの戦士が溺れるなぞ』

「……ほつといてくれ」

『イヒヒヒ。恥ずかしがるでない、わしの麗しい姿に動転したんじやる。それなら納得じゃ。精霊の美しき裸体など、まず拝めんからのお』

リリルルは声も高らかに笑っている。

『古には、たまたま水浴みをしたった精霊を見て、呪いを受けた哀れな連中もおるくらいじゃ。世の男が望んで止まぬわしの美しさを堪能した上、お咎めもなし。おぬしはほんに運がいいの』

なにも纏わぬ身のまま歩み寄るので、ヤツヒはあわてて顔を背けた。

「おまえと関わり合った時で、運なんてとっくに消えて無くなってる」

『それで皮肉のつもりか、ヤツヒ。まともな皮肉の一つすら言えんとは、おぬしはまこと……』

リリルルは大きく目を見開いて息を詰める。ため息をつくとき、首を振りながら笑みを浮かべた。

『まことプノンよのお、ヤツヒ』

「うるさい。ほつといてくれ」

河原に伏せたまま背を向けるヤツヒの傍らに、リリルルは並んで横になった。

『……のお、ヤツヒ』

「なんだよ」

『もしも、じゃ。仮に、の話じゃ。……この世に人としての生を捨て、代わりに精霊として生きる術があれば、おぬしは……。ヤツヒは、精霊になってもいいと思うか。精霊としての生を、おぬしは望むか』

川沿いに吹き抜ける夜風に葦のこすれるかすかな音が重なりながら近づいてくる。

ヤツヒはしばらく黙ったままだった。

『いや、何でもない。忘れ……』

「……それも、悪くないな」

『なんとっ』

リリルルは跳び起きた。

『ヤツヒ、まことかっ。今のは真の言葉かっ』

「……ああ」

『そうか、そうであったかっ。まさか、そのように思っているとはさすがのリリルルも気づかなかったぞ。やれ、祝えや歌え、祝えや歌えっ』

リリルルは満面の笑みを浮かべ、恥じらいもなく裸のまま喜びの踊りを舞う。クルクルと回るごとに髪がふわりと風にのり、肢体の一挙一動に、金粉のような精気があたりによぼれた。

『よきかな、よきかなっ』

「リリルル。……俺、もう疲れたよ。穢れにまみれ、声なき声も届かず、己に巣くう悪しき鷲に飲み込まれかけるなんて……。最低だっ。……俺はエナイの末としても、森の守護者を名乗るものとしても、駄目なんだ。いつそ精霊にでもなつて、自由気ままに暮らせたら……」

そう呟いた途端、勢いに乗った強烈な一撃がヤツヒに繰り出された。

『このお、プノンめがあっ』

衝撃に視界が紫に染まる。

「リリルル、やめろ」

『プノン、プノン。ヤツヒのプノンっ』

次々と繰り出される強烈な蹴りと拳に、ヤツヒは両手で頭を覆い、脚を縮めて腹を守るしかなかった。

「やめろよ、リリルル。やめてくれっ」

ふつと衝撃がこなくなる。ヤツヒは恐る恐る顔を上げた。目を真っ赤にしたリリルルが立ち尽くしている。その顔は涙に濡れていた。『いちばんのプノンは、わしじゃ……』

「どうしたんだ、リリルル」

『もうヤツヒなんて……、ヤツヒなんて大っ嫌いじゃ  
リリルルはヤツヒを睨みつけた。』

『二度と顔も見たくない。近寄るな、けがらわしいっ  
少女の姿はまるで糸がほどけるように銀の霧となって消えてしま  
った。』

「おい、どうしたんだ。リリルル。リリルルっ」  
いくら問いかけても答えはない。

暗い川のほとりに、ヤツヒは一人残された。

## 第二章（10）

\*\*\*

アミネは熱気のこもる天幕に伏せていた。  
足音が聞こえる。

顔を上げると、目の前にはリリルルと呼ばれた少女が立っていた。  
「愚かよのお。フヒヨヒヨっ！ 辺り一面、愚か者ばかりじゃ。現世はプノンに満ちておる」

少女はケタケタと笑っている。赤く潤んだ目でアミネを見つめる様子は、まるで酒にでも酔っているかのようだった。

「やい、小娘。おぬしは人と神々精霊、どちらがプノンだと思う」  
熱気と悲しみでぼんやりとしたアミネには、何を問われたのかわからなかった。首を横に振ると、リリルルは牙のような白い歯をみせて笑う。

「ふふっ。わしは見いだしたぞ。それは精霊じゃ。そして神々じゃ。力あるものと言われながら、何もせずのうのうと滅びる愚かなる存在じゃ。人に封じられながら『彼らはいつか、間違いに気づく』などというて、されるがまま、なすがまま。人に対してのわずかな抵抗も『彼らの目覚めのため』じゃと。ふんっ、笑わせるっ。まさにこの世の流れを見失った全くのプノンじゃ。だからの……」

リリルルは両手を腰において、胸を反らせる。

「おぬしに手を貸してやろうと思うた。そろそろ神々や精霊には現世から退場頂いて、人が統べる時が訪れたとは思わんか。どうじゃ。わしと共に森の神々を殺し、精霊を根絶やしにせんか。誇り高き人の世が始まるんじゃ……」

怪しげな笑みを浮かべ、リリルルはアミネに近づいてきた。

ユニは叫びそうになりながら目を覚ました。なにか、恐ろしいものが迫ってくる夢を見た気がする。暗闇に包まれていると、何も見えないことで心に湧き上がる不安で、今にも泣き出しそうな気分だった。

「アミネ様……」

呼びかけても返事は帰ってこなかった。

すぐ近くにあるはずの、石を円く組んで囲んだ焚き火は消えている。暗い中に、そのあたりだけ、ぼんやりと熾火の微かな赤い光が灯っていた。

急に衣に染み込んだ汗を感じる。草の葉を揺らし、吹き抜ける風が冷たかった。

「アミネ様っ」

声を張り上げても返事はない。

ユニはあたりを見回してから、身体を起こした。ひょうと風に草木が揺れるたび、芯まで冷えてくる。

冷えてくるのは身体だけではなかった。アミネの気配がない。

いつも、悲しみを抱えながらも気丈に振る舞っていた、優しさで強さの混ざったユニとアミネを繋げる気配が、消えかかっている。それはほんのわずかに残されたたき火の灰に混ざる熾火と同じだった。ユニの心の底へ、ぽっかりと空いてしまった隙間から寒々としたものが流れ込んでくるように感じられた。

アミネ様をさがさないと……。

ユニは目をつむり、音を一つ、二つ、と呟きながら、自らの心の内側に入っていく。内側はひっくり返るように外側へと繋がり、そのままユニの意識は魂の形をとって身体を離れ始めた。

ユニは慎重に魂の緒を残しながら身体を抜けた。

現世と狭間の地を重なりと感じながらゆらりと宙を舞い、木々の間をすり抜ける。水の流れを感じる方角に、アミネの気配が残って

いた。それはもうわずかな光にしかならないほど弱まり、その周囲を灰色の影が覆っている。

そして、何かがアミネの魂を飲み込もうとしていた。それは前に感じたことのある懐かしいにおいと、何か血のような不吉なおいとが混ざった印象の影だった。狭間の地で働きかけることのできる相手なら、今のうちに念を飛ばす方が良い。だが、この影は狭間の地と現世と、そして全く別の相にも繋がる存在だった。

このままでは何もできないだろう。現世での直接的な働きかけの方が有効な感じを受ける。

アミネが危ない。

ユニは再び身体に戻ることにした。

魂の緒を伝いながら徐々に来た道に戻る。だが、狭間の地へと魂の形になって出て行くのは比較的簡単だが、戻るのは難しかった。

身体は魂を吐き出そうとする性質がある。まるで貝が異物を吐き出すように。もともと、魂と肉体という異なるものを無理に結びつけたのが、現世を闊歩する生き物だった。普通、一度離れた肉体と魂は結び付かない。つまりそれが死だ。死したものが二度と甦らないのは、魂と肉体の結び目が時と共に離れたら、二度と同じように結べないからだった。

だが、ユニは自らの技で探索のために一度魂を肉体から離れた。

再び戻らなければ、肉体は朽ちて死を迎えてしまう。しかし魂の緒で結ばれていても、一度結びつきの弱まった肉体に魂を再び入るのは難しい。それはへその緒で繋がれた生まれたばかりの赤ん坊を腹の中に再び戻すようなことだった。

つまり、時の流れが逆転しないと実現しない。

ユニは意識を時の流れに合わせ、思考を逆転させていく。記憶の全てが逆さまに流れていく。

水の流れは下流から上流へと引き上がり、落ち葉は大地から枝に吸い付くように舞い上がっていく。水の滴は水面から盛り上がり、宙を舞い、動物たちは後ろへと後ずさっていく。



その一連の逆転した時の流れ沿って、ユニの魂は再び肉体へと吸い込まれていった。

## 第二章（11）

\*\*\*

心のうちを見透かすように、リリルルはじつとアミネを見つめて  
いる。底知れぬ闇が赤い瞳からは感じられた。

このまま吸い込まれてしまいそうな引き付けるものがあって、ア  
ミネはどうしても目を逸らすことができなかった。

「おぬしが『外されっ子』になったのも、リリルル様はすべて承知。  
そのうえでの相談じゃて」

「外されっ子……」

「そうじゃ。イアの大巫女に、おぬしは精霊を感じ交わる力も、神  
殺しの力も封じられとる。巫女にありながら、力を外されとるから  
の、外されっ子じゃ。……わしなら、おぬしの外された力を取り戻  
すことができる。その力をさらに強めることもできる。さすれば、  
あらゆる森の神を殺し、精霊を滅ぼし、従えて、このような位にお  
ぬしを落としたり大巫女に見せつけてやれる。おぬしが望むなら、外  
された力を取り返したうえに大巫女を討ち滅ぼすことも思いのまま。  
……どうじゃ」

アミネの耳元にリリルルがささやいた。

「さすれば、おぬしが新しいイアの大巫女じゃ。強大なイアの巫女  
共を統べる、真の大巫女の誕生じゃ」

「真の……大巫女」

「そうじゃ。お主はもとは力のある巫女。外されっ子にされて辺境  
に流されるなど、おかしなこと。……思い出してみい、あの大巫女  
がこれまで一柱でも神を封じたことがあるか。否、じゃ。あやつに  
そんな力はない。せいぜい、大神殿の鏡が持つ神気を自らの力と偽  
り垂れ流す程度じゃ。力のないものが地位につくと、残されたのは

保身ばかりじゃ。自らを脅かすことになりそうな力ある巫女は見つけ次第に最も激しい戦いの予想されるところへ送り込み、殺したりする。つまり邪魔者を次々と殺していくんじゃ、あるいは神鏡で力を吸い取り、おぬしのような外されっ子にして辺境に送る。人の世にとつて、これが良いことだとお主は思うか」

リリルルは血のような舌で唇を濡らし、再び語り始める。

「そのような穢れた存在が新たな世を統べる巫女となってよいか。

……否、じゃ。新たな世を統べるは力ある清らかな存在でなければならぬ。その点、おぬしこそ新たな世の大巫女、真の大巫女にふさわしいのじゃ」

「でも……」

「森神の穢れを恐れとるなら、案ずるな。わしが思うに、真の巫女にはそれと分かる痕しるしが必要じゃ。万人にそれと分かる痕がの。森神の呪いが残した傷痕は見事に蛇の姿を描いとる。これこそ、まさに真の巫女の痕。消え行く森の神に託された蛇。この蛇が大地を統べ、役目を終えた神々と精霊を追い払い、鏡の力を騙る偽りの大巫女の姿を暴き、この人の世を全きものへとしてくのじゃ。……さあ、真の巫女への道を歩み始めようぞ」

リリルルの瞳に一層強い光が差した。眼差しはアミネの内側に虫が身を擦りながら入り込み、そこから糸を引いて身体を操るように感じられた。

巫女として身の清めを第一にしていた時ならば、とっさに意志の力で視線を避け、反撃へと転じていただろう。それはあらゆる存在との融合を拒む、巫女としての習練の現れだった。神殺しと同じく自らを刃で傷つけてさえ己の魂を守る、巫女としての宿命と生きざま。

だが、今のアミネには操られること、内側に入り込まれ蝕まれていく感触が心地よかった。

自らの存在が消えて行く。ただ、操られるだけの影。

でも、巫女としてすべてを拒み続けていた時でさえ、私は大

巫女の影のようなからっぽでしかなかったのかもしれない。

ふと、ひとつの疑いが浮かぶ。

巫女の身体はすぐに浮かんだばかりの疑いを忘れ去ろうとしたが、アミネの内に入り込んだ虫のようなリリルの気配が、いくつもの糸を放ち、消え去りそうになった疑いをからめとった。

疑いは身を滅ぼす。

疑いは巫女として抱いてはならない最大の罪悪のひとつ。

疑いは自らの存在を否定する悪しき感情と、穢れに結び付くあつてはならぬもの。

だが、消えずにアミネの内に残ってしまった疑いは、次から次へと新たな疑問を呼び覚ました。

なぜ、森の神は封じられなければならないのか。

どうして森の神は我々を襲うのか。

巫女は森をなぜ清めなければならないのか。

神を封じるとは、本当はどういうことなのか。

巫女とは何なのか。

穢れとは何か。

私のすべては、大巫女に蝕まれていたのではないか……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5925g/>

---

神封巫女伝

2011年4月12日11時40分発行